

- 一、勉学修養之資 昭和 11 年 2 月 12 日
- 一、雑誌部々報及短歌会之報 昭和 11 年 12 月 28 日
- 一、万葉人の国家及国体観 昭和 12 年 10 月末
- 一、父への便り 10 通
- 一、昭和 12 年日記抄 — 青春のわが心の軌跡

一、勉学修養之資 昭和 11 年 2 月 12 日

(山口高校一年在学中発奮 古典より三カ条に自記二カ条を加へ以て五カ条となし 毎朝朗誦す)

- 一、大日本国ハ神国ナリ 天祖ハジメテ基ヲ開キ 日神ナガク 統ヲ伝給フ 我国ノミ 此事アリ 異朝ニハ其類ナシ 此故ニ神国ト云フナリ
- 一、謹ミテ按ズルニ 神州ハ太陽ノ出ル所天気ノ始ル所 天日ノ嗣世々晨極を御シ終古変ゼズ 當ニ大地ノ元首ニシテ万国ノ綱紀ナリ 誠ニ宜シク宇内ニ照臨シ 皇化ノ及ブ所 皇室ノ尊嚴 乎トシテ冒スベカラザルナリ
- 一、何レノ国ニ生レ如何ナル人カ 此道ヲ聞キテ 我日本ヲ仰ガザル者有ラン 然ルニ我国ニ生レテ神ノ子孫タル人 国ノ粟ヲ食ミナガラ 他邦ノ道ヲ崇メ我祖先ノ道ヲ知ラザルハ 假イ万卷ノ書ヲ暗ンズトモ 一文不通ノ盲人ト云フベシ 最モ憐哀スベキ哉
- 一、大日本帝国ハ神国ナリ 神ノ子トシテ此国ニ生ヲ承ケタル者 宜シク皇室ノ尊嚴国体ノ精華ヲ究メ以テ我国ノ神国ナル所以ヲ知ルベシ 是レ実ニ国民タル者ノ本務ニシテ万事ノ根本ナリ 是ヲ究メ以テ国威ヲ四海ニ輝カシ建国ノ大理想ヲ実現シ建国ノ大理想ヲ実現シ 全世界ヲ化シテ高天原トナス 嗚呼 是 日本男子ノ最大ノ義務ナリ
- 一、嬉キ哉 此国ニ生レテ 然モ歴史輝ク防長ノ青年トナリ来レルハ 更ニ奇ナル哉 我天祖天照大神ヲ祀ル大神宮ニ仕ヘ奉ル 神司ノ長子トシテ生レタルヤ 而モ体健カニシテ晩学進ミ 山口高等学校ニ学ブヲ得タリ 是 神ノ慈ナリ 「爾ジ此国ノ人トナリ惟神ノ道ヲ修メ産靈ヲ極メ 此国ノ発展ニカヲ尽シ 遺勅ノ示ス所ヲ行フベシ」ト 我ハ神ノ子ナリ 然シテ生レナガラニシテ神命ヲ有ス 我ガ使命ヤ重シ 神ノ命ズル所ニ從テ生命ヲ以テ是ニ當ラン 神ハ我ヲ守リ給フ 神ヲ照覧アレ 神ノ御旨ニ違フ事ナク 秋津島益々 富ミ榮ヘシメン事ヲ

上田勝彦

昭和十一年二月十二日

近來雑誌部は非常に衰へて来たといふ声を一般の間に聞く様になった。げに一学期末にお送りした鴻峰三八号は生徒の作品の貧弱な点では実に空前のもので、委員の一人として責任を痛感してゐる。これ実に委員の菲才と努力の足らざるに依ること多く、自ら恥ぢると共に将来の努力を誓ふものである。

だが交友会誌たる鴻峰は単に雑誌部の会誌ではなく校友会の会誌であり、且亦我校文化の反影であり、自己の姿の現れである以上、交友諸兄はも少し関心を持ち忠実であつてほしいのだ。

雑誌の不出来は勿論雑誌の委員の無能と怠慢も依るが、交友諸兄の援助支援なくしては健全なる発展は望まれないのである。

我々委員は雑誌を作る毎に原稿の少いことを嘆かねばならぬ。吾々交友の雑誌である以上文芸作品は勿論のこと、各種文化団体の研究、個人の研究論文意見の感想・批判等をどしどし発表されていゝのである。交友諸兄の中には熱心に研究に携はり、堂々たる意見を持ってみられる方が少くない。亦文芸方面に於ても造詣の深い、熱心な研究者もある。これらの人が狭い自分自身の中に立籠もらないで、その抱蔵する所のものを自由に大膽に吐露して欲しいのである。かくしてこそ進歩ものぞまれ、立派な雑誌も出来るのである。

亦校友会雑誌は吾々に自己認識の過程としての任務を務めるものであると思ふ。かゝる事は吾々無能者の云ふべきことではないかも知れぬが、雑誌の為を思ひて一言せざるを得ない。此の意味に於て吾々は此の雑誌を通じて吾々自らを見直すべきものであると思ふ。内容の如何は即ち吾々の生活の態度を反影するものである。されば真に学生らしさの溢れた真摯なる学的欲求、熱烈なる青年の生活意識の躍動せる作品がどし／＼出るべきではあるまいか。交友会誌は同人雑誌とは自ら異なるものである。吾々は交友諸兄が此の会誌を再認識し、此の会誌にも少し親しみを持って、愛護し援助して頂くことをあ切望する次第である。

前号 38 号は内容の貧弱という批難が強く此の点遺憾に堪へない。然しこゝに他校に先立って校内全般の学問的乃至文化的意識を覚醒し、更に情操教養の養成に資せんと意図の下に行はれた啓蒙的な試みたる良書推薦は、我が鴻峰の一大特色で、誇るに足る試みであつたと信じる。これは吾々の當然の要求であり、吾々の読書熱を高め、正しき読書の方向を示唆する上に大なる成功を取めた。此の点発案者及び諸先生に大いに感謝する次第である。吾々はこの成功に鑑み、諸先生にお願ひして尚これを続行し、少し掘り下げて読後感といった種のを主として掲載し、此の試の徹底を期したいと念願するものである。

最近秋に創作懸賞募集を行ひ、其の選を佐藤・満井・小川先生にお願ひしている。此の試は大いに有効で応募者も少なく今回は十二篇といふ数のものを戴いて大いに意を強くした。これは連年続行されるものと思はれるが、丁度夏休を前にしてゐるから、汗を流しての努力の結晶をどし／＼投稿して頂きたい。吾々には仲々立派な巧みな小説は望めないにしても、唯その態度に於て真摯であり、情熱あり、その作品に迫力が感じられ、問題を提起される様な作品が望ましい。かくして高校雑誌の面目躍如たるものがあると思ふ。

秋は創作懸賞募集もあり相当の原稿が集る様であるが、春は非常に少い。小説は特殊の者を除いては仲々書き難いかも知れぬが、随筆・小品風なものは割合に楽に書けると思ふ。近年鴻峰に表はれた作品の中にはこうした種類のものが極めて少い。吾々の将来伸ばさんと努むべきは此の方面にあるのではないかと思ふ。来年の春には此の方面のものをどしどし提出して頂きたいと思ふ。

短歌会が始つて以来隆々たる発展を遂げて来たが、此の春岡部・見坊・山内・坂部・吉野・川廷等の優秀なる多数の先輩を一時に失ひ、僅かの会員を残すのみで、多少の新会員を加へたとは云へ未だ会員も少く、且未熟にて誠に寥々（りょうりょう）たる有様である。

しかし、佐藤・三井・小川・隆四先生及宇佐川氏の熱心なる御指導に依り、遅々たりとも健実な歩みを続け、毎月一回の割合にて会を開催し、四月に第十九回を開いてより二十四回に至った。此の間会員は未熟なりとは云へ熱心に多数の詠草を提出し、先生を中心として互に忌憚なき批評・意見を開陳し、生活態度を正し人格完成の一助として、真剣な態度を以て相互に錬磨して行き、歌の巧拙は問題外として誠に真面目な魂に触れ合ふ気持よいま面白会である。

やがて基礎なり来年の発展を期待していゝと思はれる。

こうした会であるのだから、多少なりとも短歌に興味を有する者はどん／＼出席し、生活の真の声を挙げて熱烈なる感情を歌って欲しい。やがてレベルが上がったら旅行等をも企てゝみたいと思ふ。

次に現会員を示せば次の如し。佐藤・三井・隆・小川先生、図書館の宇佐川氏、文三乙山根・文二甲坂井・文二乙茂木・上田・毛利・杉山・池田、理一甲永井、以上。

近年は育同好の士が相当出て来たようで誠に喜ばしい次第である。益々精進を進め、新たに会を組織せらるるまでに至られんことを望む。

嘗て開校以来未だ年浅き頃、山高文化黄金時代が現出したことがあった。これは開校当時の先輩達が、山高文化建設の熱情に燃え着々とその実績を挙げて来た結果で、当時雑誌部は最も盛んで、その会誌内容の充実せる点に於て断然他校を押し、山高文化を天下に発揚し、加之色々の文化的活動の中心となってその機能を充分に発揮したのであった。

然るに今日に至り雑誌部の凋落著しく、前記の如き批難を蒙るに至ったのは、此の光輝ある歴史に対しても委員として誠に恥しく思ふのであるが、これ委員の無能もその罪の一半ではあらうが、然し亦時代の一般学生の気風の著しい影響は否めないと思ふ。最近文化運動の停滞し続けたのは亦一般の自覚・熱意に欠くるものがあるからだと思ふ。

本校文化運動の中心に立つべきである雑誌部の此の停頓状態は此の一学期に至ってその極に達し、骨を抜かれた如くに萎縮してしまつたのである。此の最も沈滞した時に当たって吾々は大火災の為に校舎を失ふといふ非常時に遭遇したのである。何といふ不思議な偶然であらうか。吾々は今や立上がり、山高文化に生きた魂を吹き込まねばならぬ時となつたのである。吾々は他の学部と協力して学校創立当時の先輩の情熱・気概を以て努力し、やがて再び山高文化黄金時代を作るべくその礎石とならんことを念願とする。それには交友諸兄は自覚して文化に目覚め、有能な士を委員に推して大いに活動させると共に、文化部並びに文芸部に対する正しい理解を持ち援助を賜らんことを切望する次第である。

終りに雑誌部及び短歌会に尽力、孤軍奮闘された山根兄を送るに當って、兄に対して深く感謝の意を評して筆を置く。

我が国は神国である。これは肇国（ちょうこく；はつくに）以来の歴史が示す厳然たる事実で北畠親房等先賢の唱道した所であるが、亦我々の信念でもある。即（すなは）ち歴史的には天照大神の神勅を畏（かしこ）み、瓊瓊杵尊（ににぎのみこと）の降臨ありてより以来、万世一系の皇統は天地（あめつち）と共に窮りなく、御列聖は天（あま）つ神の子たる神として統治し給（たま）ふたのである。而（しか）して思想的には我民族の固有思想は所謂「神ながらの道」であって総ては神意通りに行はれ、その間に一寸の私意も許されず、神勅のままに今日の隆盛を来（きた）したのである。

かくの如くして我国体は厳として肇国以来その本質を保持し来り、その間に国体の歴史の変遷なきこと恰（あた）かも太陽に比すべきで、古今を通じて一（いつ）にして少しも変化することがなかった。されど国体観念には時代時代に依り変遷あれば、よりよく国体の本質を認識する為には、我国最古の文献の一（ひとつ）たる万葉集に現はれてゐる我々の祖先の国体観を考察することはあながち無駄ではないと信ずる。

葦原の水穂の国は 神ながら 言（こと）挙（あ）げせぬ国、然（しか）れども 言（こと）挙げぞ吾（あ）がする、言（こと）幸（さき）く 真（ま）福（ま）さきく座（ま）せど、恙（つづみ）なく 福（さき）くい座（ま）さば、荒（あ）磯（い）浪（なみ）ありそなみ 有（あ）りても見（み）むと 五（い）ほえ 波（なみ）千（ち）重（ち）え 浪（なみ）重（し）きに、言（こと）挙げぞ吾（あ）がする

反歌 敷島の日本（やまと）の国は言（こと）霊（たま）の佑（たす）くる国を 真（ま）福（ま）さきくありこそ（十三卷）

此歌は人麿歌集にある。多分遣唐使派遣に当たり壮行の為に詠（うた）ったものであらう。歌意はわが日本国は神国であってすべては、神意のまゝに現れるのであるから、人がとやかく私意を申し出づべきではない。しかし、今貴下は渡海に当って、特に自分は希望する所を神に申し出るのである。どうか万事幸福において遊ばされるやうに、と歌ってゐるのである。

私はこの歌から「葦原の水穂の国は 神ながら 言（こと）挙げせぬ国」及「敷島の日本の国は言（こと）霊（たま）の佑（たす）くる国」を取り上げることが出来る。先づ「葦原の水穂の国は 神ながら 言（こと）挙げせぬ国」の考察に当り「神ながら」の意識を明（あきら）かにせねばならぬ、偕（さ）て、「神ながら」の語は色々の意味に解せられてゐるが、「神在随」「神随」の用字が抵当せるものらしく、それに従ふと「神のまゝ」「神なるまゝに」という意味になる。その語源的解釈はさて措き、「神のまゝ」「神なるまゝに」とは外観的には自然の発展そのまゝの姿であるものを内観する時にかくいふのであらう。されば「神ながら」とは神意のまゝで少しも人為の加わらぬこと、即ち自然なことをいふのであらう。

次に「言（こと）挙げせぬ」に就て一考察を加へるならば、此の語は全くものを云はぬことではない。実行出来ぬような言（こと）をみだりに云はぬことである。即ち平たく云へば、これも自然で人間の作為の加はらぬことを意味してゐるのであらう。かく見れば「神ながら 言（こと）挙げせぬ国」とは「我国は神国で、総ては神意のまゝに自然に行はれて人為を許さぬ国」との意となる。これは恐らく日本特有の伝統的な根本思想で、日本の国のなりたちが最もよく「神ながら 言（こと）挙げせぬ国」たる所以を物語ってゐると思ふ。吾々の知る所では、外国には征服・契約等の人為に基かぬ国はない。所謂作られた国である。然るに我国は造物主を説かず、神・人・国土・万物皆神より生まれたと観ずるのである。即ち我国は何等言（こと）挙げすることなく、神意のまゝに自然に生まれた国家にして建国・創業などの言葉を以て説くことを得べきものでない。これ我国体の特異性で、「神ながら 言（こと）挙げせぬ国」がらを如実に現はしてゐる。然してこれは唯国家成立のみならず、太古より今日に至るまでに発展して来た国史の跡が、更によく「神ながら 言（こと）挙げせぬ」精神を発揮して居り、此の言葉の誠（まこと）に由あるを感じしめるのである。忠の観念も此の「言（こと）挙げせぬ」思想が基となつてゐる。古来天皇に対する忠節は理論を超越して

ある。何等の理屈なしに絶対無条件に天皇(すめらみこと)を崇敬することが、日本民族の自然な感情である。現にこれは今日とてもその通りで、日本民族が2600年あらゆる大陸影響や文物制度の変遷に逢ひながらも、微動だにすることなく益々発揚して来た固有思想である。かくみれば「神ながら言挙げせぬ」という観念は誠に当を得たもので、日本民族固有の思想だと思はれる。

第二に「敷島の日本の国は言霊の佑くる国」に就て考察しよう。此の語は「我国は言語に精霊があつて、その精霊が人々を助け国をも栄えしめるといふ国」であることを意味してゐる。即ち言葉には霊があるとする見解であつて、その為言に発せられたことが実現性を有することになるのである。言葉の神力が認められてゐたのである。

万葉集には言霊の語も多く見付けられるが、要するに日本古代の信仰であつて、一度口に出した言葉は行(おこなひ)として実現されるべきであるとの言行一致の思想であり、言葉の尊厳性をよく認めた思想である。しかれば此の「言霊」の思想と先に挙げた「言挙」の思想との関係はどうであらうか。「葦原の水穂の国は神ながら言挙げせぬ国」に於てその「言挙」せぬことに殆(ほとん)どいひ知れぬ誇を感じ、言外に「言挙」を賤(いや)しみ軽(かる)んずるのが古代人の心であつた。惟(おも)ふに「言挙」の言は契沖が云へる如く「言(こと)」は「事(こと)」と相通じ、従つて「有事必有言、有言必有事」と云ひし如く、その真(まこと)に言(こと)たるものはそのうちに真実を包蔵しなければならぬ。即ち真の行となる言こそ真の言である。然して真実を含む言葉、真実の行となる言はやがて生ける言葉、魂のある言葉である。ここに言霊の思想の根柢があるのであらう。而して古代人は実に此の「生ける魂」を「言霊」として崇(あが)め尊(たふと)み、その「言霊」の幸(さき)はひ佑くる国なるが故に「言霊の佑くる国」「言霊の幸はふ国」と日本(やまと)を祝福したのである。しかるに古代人は「言霊」を尊み「言挙」を賤しんだが、この両者は反対を意味しなくてはならぬ。然らば「言霊」とは言葉の含む真実性であるに対し、「言挙」とは真実より遊離せる「空言」でなくてはならぬ。然り、真実ならざる言葉は不自然であり、私意・作為のある言葉で神意に悖(もと)るものである。我国は総てが神意のまゝに自然に行はれるので、これに反する言葉は皆「空言(そらこと)」に外ならぬ。即ち古代人は実に一切の空虚や空理空論や抽象観念の遊戯を排して、真実に基き物の実質に徹底せんとし、寡言を尊み実行実在を重んじたのである。さればみだりに言はず一旦云へば必ず行ふので、かく言葉が行となる根底には実に誠の精神が存するのである。即ち「言挙」「言霊」の根本思想は誠で、これが日本固有思想の根本をなし、この「誠」こそ神意であり、自然である。ここに至つて、我国は誠の国なり、我民族は誠の民族なり、而して建国の理想は誠の宣布(せんぷ; 広く行き亘らせる)なりと主張してよいかと思ふ。ここに我国風の一面があると思はれる。

第三に注目すべきは「皇神の厳しき国」なる思想である。

神代(かむよ)より言伝(いひつ)てけらく虚(そら)みつ倭(やまと)の国は、皇神(すめかみ)の厳(いつく)しき国、言霊の幸(さき)はふ国と語り継ぎ言ひ継がひけり、今の世の人も悉(ことごと)、目の前に見たり知りたり(巻五)

この歌は山上憶良の歌で「皇神の厳しき国」「言霊の幸はふ国」を強調して居る。皇神とは代々国をしろしめす天皇である。憶良の此の歌は、日本は神代依頼神々が連綿としてしろしめして居る国であり、さうして行を尊重する国であるといふ意味である。これは誠に憶良が唱へた日本精神論・日本国家観といふべきである。元来彼は儒教思想を取入れた現実的傾向の極めて旺盛な歌人であつたに拘はらず、やはり皇神を中心とする神国思想を強調してゐるのは甚だ注目に値すると思ふ。「倭の国は皇神の厳しき国」、これ実に日本は神国であり、

天皇は現(あき)つ御神(みかみ)であらせられるといふ国民的信念である。されば此の語は盛も適切に日本は神国なりとの国体観を表現して居ると云ふべきである。

次に人麿の歌に日本神話の根幹ともすべき高天原から天孫が降臨されて地上国家を建設される神話が簡明に叙せられた歌がある。

天地(あめつち)の 初(はじめ)の時 久堅(ひさかた)の 天(あめ)の河原(かはら)に 八百万(やほよろづ) 千万神(ちよるづがみ)の 神集(かむつど)ひ集ひ座(いま)して 神分(かむあが)ち あがちし時に天照(あまて)らす 日靈(ひるめ)の尊(みこと) 天(あめ)をば 知ろしめすと 葦原(あしはら)の 水穂(みずほ)の国を 天地の 依り合ひの極(きは)み 知ろしめす神の命(みこと)と 天雲(あめくも)の 八重(やえ)かき別けて神下(かむくだ)し 坐せまつりし

此の歌は日並皇子(ひなみしのみこ; 草壁皇子)の殯宮の時に詠んだ歌の序である。人麿の歌の特色の一は神話的叙述の多いことで、これはその特色の最も著しいものである。此の歌は珍らしくも国民伝誦(でんしやう)としての天孫降臨の神話を詠み込んである。神話が記紀に書かれて固定したのは人麿以後のことであるから当時伝誦せられてゐたものであらう。此の歌に於て先づ第一に天地の初めし時、天照大神が天上の主として天上を御統治になることが明にされてゐる。即ち大神は高天原の神々を始め、国土・群品(ぐんびん; あらゆるもの)を撫育し、生成発展せしめ給ふのである。此の天照大神は、この大御心大御業(おほみわざ)を天壤(てんじやう; 天地)と共に窮りなく彌栄(いやさか)えに発展せしめられるために「葦原の水穂の国を天地の依り合ひの極み知ろしめす神の命」として皇孫瓊瓊杵尊を降臨せしめられ地上の主を確立し給ふたのである。ここに肇国の大業が成つたのである。

「天地の依り合ひの極み知ろしめす」は天地が開いて以来再び天地が寄りあう末の時、即ち永遠に御統治遊ばされるの意で、言簡なれども天壤無窮の神勅の精神が歌はれてゐるのである。即ちここに我が国体は確立し天を知ろしめす大神の御子孫が、此の瑞穂の国に君臨し給ひ、宝祚(ほうそ; 天皇の位)の栄えまさんこと天壤と共に窮りないのである。

此の歌は彼の作り出したものではない。肇国以来伝誦されて来た古代人の信念であり信仰であつた。何故ならば後の記紀や祝詞に表はれる神話と、内容のみならず字句まで非常によく類似して居ることである。然して此の歌は記紀に先んじてゐる点からも大いに注目されてよいと思ふ。私は此の歌に於て古代人が天壤無窮といふ如何に確乎たる国体観を持ってゐたかを知り得る。天壤無窮、それは皇位・皇統・皇国の無限なる発展展開である。これは神話や歌の一節とは云へぬ現実の事実である。こゝに言霊の微妙なる作用をみる。而して天壤無窮とは単に時間的連続に於ける永久性を意味するのではなく、実に現在を意味してゐる。天皇の大御心・大御業には天祖の御心が拝され、此の中に我国の無限の将来が生きてゐる。実に過去も未来も今に於て一になり、我国が永遠の生命を有し無窮に発展するのである。天照大神の大御心、神国の建設・誠の宣布は、そのまゝ今行はれつゝあり、永遠に展開して行くのである。日本国の進む所、吾等の向ふ所それは自ら明である。

以上を要するに、古代日本人は真に日本は、(一)「神ながら言挙げせぬ国 (二)「言霊のさきはふ国」(三)「皇神の厳しき国」而して最後に「天照大神の御子孫の統治遊ばされる国」で「天壤無窮の国」なりとの信念を持って居たことを知り得る。これらの項目は我国風の一面に過ぎず、他に多くの要素をも見出す事も出来やうが、一面の真を穿(うが)って居ると思ふ。而して万葉人の国家観は理論・合理的解釈を超越した絶対的なる信念であつた。神ながらの大道により、御神勅そのまゝが、何等言挙げすることなく自然に、言霊の幸はふまゝに実現し、永遠に展開して行くとの信念、それは絶対的なものであつた。人為の如何ともすべからざる厳然たる事実であつた。さればこそ藤原仲麿も歌って曰く、

いざ子供狂行(たはわざ)な為(せ)そ天地(あめつち)の固(かた)めし国ぞ 大和島根(やまとしまね)は(卷二十)

と

万葉人の天皇観

万葉集の時代は、所謂神代からは遙に遠ざかってゐた。しかして国家は漸（ようや）く充実し高度に進んだ支那文明の洗礼を受け、文化的思想的に種々の変動を生じてゐた。即ち日本人の直観的感情的生活は、理性的解釈を必要とし合理的精神が流行してゐた。これは、神は絶対的なりとの信仰に破綻を生じしめ、従て現神（あきつかみ）たる天皇と神とは分裂し、天皇は神なりとの一元的な考へから、天皇は人格的な存在で神の下にあるとの二元的な考へに変わった。此の思想は既に聖徳太子の十七条憲法にも現はれてゐるのであるが、万葉集に於ては、人麿を契機として表はれてゐる。これを天皇を神とする思想の展開から眺めると、人麿の思想は神話的叙述をとって天皇を神として見てゐるが、次の時期に於ては儒教や仏教老荘の洗礼を受けた憶良等の歌に強い現実的傾向がみられる。ここでは現実界と超現実界は載然（さいぜん；はっきりと）と区別せられ、別に現御神（あきつみかみ）としての思想となり、更に天皇に対する忠君思想となってくる。かくして最後の家持の歌に於ける忠君思想・国家思想にその点が強く見られ、人麿の思想とは可成りの相違が出てくるのである。然しもとより何れも国家的精神を中心として居り、現御神の思想によって両者は統一されてゐる。次に此の各々の特色を詳しく眺めよう。

やすみししわが大君は 神ながら神すさびせずと吉野川滝（たぎ）つ河内（かふち）に 高殿と高知りまして
上り立ち国見を為せば 豊（たたな）はる青垣山（あおがきやま） 山神（やまつみ）の奉（まつ）る御調（みつき）と 春
辺（はるへ）に 花かざし持ち 秋立てば黄葉（もみじ）かざせり 行（ゆ）き副（そ）ふ川の神も 大御食（おほみ
け）に仕（つか）へ奉（まつ）ると 上（かみ）つ瀬に鶺鴒川（うかわ）を立ち 下（しも）つ瀬に小網（さで）さし渡す
山川も寄（よ）りて仕（つか）ふる 神の御代かも

反歌

山川も寄（よ）りて仕ふる神ながら滝つ河内に船出せずかも（巻一）

此の歌は持統天皇の御代に吉野川のほとりにある離宮に供奉（ぐぶ）して詠んだ人麿の歌である。此の歌の構成は、天皇が吉野の離宮にお上りになって御覧になると山川の神までも奉仕してゐるが、これは誠に神の御代とも称（たた）ふべき御代であると感嘆して一首を結んでゐる。

この歌の注意すべきは「神ながら神さびせず」の句である。これは神意のまゝに神として御行為遊ばすといふ意である。この句は人麿の天皇観を特徴づけてゐる。この語は、大君は神にゐますといふ思想をはっきり表はしてゐる。加え此の語は神の本質に徹した言である所に一層の重要性がある。さういふ神の本質を以て天皇を表はしている所に人麿の天皇観の特質が見られる。然して短歌は山川の神も寄り靡（なび）て奉仕して居る所の天皇が神として神意のまゝに水の奔流する河内に船出し給ふてゐるのを仰（あふ）ぎ見たときの敬虔な情を歌って居るのである。以上の例に従つて人麿は現神たる天皇を明らかに神として「神ながら神さびせず」と認識したのであらう。伝統的な国家意識の強かつた彼には合理的な見解を超越して、人間の現実界と超現実的な世界との区別を断つて、天皇は神なりと歌つたのである。曰く、

大君（おほきみ）は神にし坐（ま）せば天雲（あめくも）の雷（いかづち）の上に庵（いほり）せずかも（巻三）

雷丘を直ちに雷そのものとして歌つた所に大君が神にまします所以がある。

皇（おほきみ）は神にしませば真木（まき）の立つ荒山中（あらやまなか）に海をなすかも（巻三）

皇（おほきみ）は神にし座せば赤駒の匍匐（はらば）ふ田井（たゐ）を京師（みやこ）となしつ（巻十九）

大王は神にし座せば水鳥の多集（すだ）く水沼を皇都（みやこ）となしつ（巻十九）

荒野らに里は有れども大君の敷きます時は京師（みやこ）となりぬ（巻六）

真木立つ荒山中に海をなし、田井や水沼を都となし、荒野の京師となるが如きは、到底人間業（ひとわざ）では出来ぬ事である。実に天皇は神にましますが故にこそ出来るのである。人間業でない天皇、それは実に神であるからで、此の天皇観及び天皇に帰一する情感生活に、伝統に生きる人麿の特色が見出せる。

次に人麿時代から家持時代への過渡期を代表する憶良の思想に移る。彼の思想態度は人麿に比し一步躍進してゐる。それは前に挙げた「神代より云伝（いひつたへ）て来（け）らく云々」の歌が最もよく示してゐる。人麿の思想は神話的に歓迎されて居り、天皇を神と不可分の現御神として、その御行為を叙事的に表現することによって天皇讃仰（さんこう；仰ぎ尊ぶ）の思想を表はすのであるが、憶良の場合は古代精神・言霊の思想は持つてゐるが、天皇に就てはその行為道義を端的に叙してゐるに過ぎないのである。これは彼の性格にも依るであらうが、現実的な立場に立つ儒教思想が、それまでの超現実界と現実界、神の世界と人の世界とを殆ど区別しなかつた万葉人に、現実に対する意識を深めさせたと思ひ得ると思ふ。

最後に大伴家持の天皇観を考察する。

高御座 天つ日嗣と天皇（すめろき）の神の命（みこと）の 聞こし食（を）す国のまほらに（巻十八）

彼の天皇を表はす言葉は大部分「天皇の神の命」である。これは天皇即神であるといふ思想の現れとも見られるが、「神の命」といふのは「神のみことをもちて行はれる方」の意である。然らば天照大神を神とする信念から云へば、天照大神の命をもちて行はれる方が皇孫であり、代々の天皇であることになる。従て「天皇の神の命」といふ言葉は現神としての天皇といふことと同一である。かく解釈することが当時の思潮、家持の態度から見て自然である。この語は人麿時代では天皇即神と使用されたであらうが家持時代にかく変わって使用される処にも、天皇観の推移が見られる。即ち天皇は神であると一元的に見ず、彼の現実的な眼には天皇は神から独立した現実的なものであった。而して次の歌がその思潮を跡づけてゐると思ふ。

天皇（すめろき）の御代栄えむと東なるみちのく山に金花咲く（巻十八）

降る雪の白髪（しろかみ）までに大皇（おほきみ）に仕へまつれば尊（たふと）くもあるか（巻十七） 橘諸兄

此の歌の如く国家の現実的な状態を観察しその立場に立って詠んだ歌は人麿時代には見られなかつた。以上の如き天皇観の推移は自然的な所もあらうが、大陸文化の影響も著しかったと思はれる。憶良にしても家持にしてもこの洗礼を受けて居り、彼等は当時於ける合理的な頭脳を有する進歩的な人であった。かくて現実界と超現実界は区分され神話時代と人代とは分けて考へられるに至った。しかしそれは一応限界をつけたので、根本に於ては神の世界と人の世界とは交流し神人は合一するのである。即ち現御神の信仰がそれである。「わが大王神ながら神さびせすと」の思想は人麿のみでなく、ともすれば分裂しながらも神人を合一せしめ全万葉人の天皇観の中心となつたのである。

皇室の御聖徳

私は先きに万葉人の国体観天皇観の一端を考察した。然して彼等が我国は神国であり、天皇は神であるとの信念を有し、現御神の信仰に依り天皇に帰一して以て神人合一を求めてみたことを知り得た。

万葉人がかかる認識や信念を有してゐたことは「言挙げ」せずして明なことではあるが、亦一面列聖が真に神たる本質を顕現し、万民を愛撫し給ふた絶大なる御聖徳に依る所が大きいと思はれる。次に皇室の御製（ぎよせい；天皇の詠んだ和歌）を拝し聖徳の一端を偲ぶことにする。

食国（をすくに）の遠（とほ）の朝廷（みかど）と汝等（いましら）が斯（か）く罷（まか）りなば平（たひ）らけく、吾は遊ばむ手抱（たむだ）きて我は御在（いま）さむ天皇朕（すめらわれ）が うづの御手（みて）もち かき撫（な）で

ぞ ねぎたまふ うち撫でぞ ねぎたまふ 帰 (かへ) り来 (こ) む日 相 (あひ) 飲まむ酒 (き) ぞ この豊御酒 (とよみき) は

反歌一首

大夫 (ますらを) の 行 (ゆ) くとふ道ぞ凡 (おほ) ろかに念 (おも) ひて行 (ゆ) くな大夫の伴 (とも) (巻六)

此の歌は天平四年聖武天皇が海を節度使の卿等に賜った時の御製である。節度使は諸国の軍事を檢閲する使で遠隔の地方に赴くのである。此の御製は汝等が我が統治する遠隔の地方に、かくの如く任に赴くに依って、朕は天皇として汝等の労を慰 (ねぎら) ふのである。還り来む日にはこの御酒を酌んで歡 (よろこび) を共にしようと思ふ。汝等の行く道こそは大丈夫の行くといふ道であるぞ。粗忽 (そこつ) に思つて行くべきではない、といふ意を御示しになってゐる。「天皇朕が珍 (うづ) の御手もち搔 (か) き撫でぞ労 (ねぎ) 給 (たま) ふ 打 (う) ち撫でぞ 勞ぎ給ふ 還 (かへ) り来む日に相飲まむ酒ぞ この豊御酒は」何という慈恩に富んだ御言葉であらうか。誠に千古に仰ぐべき大御心である。反歌も実に力強く千鈞の重みがあり相共に絶大なる御聖徳を表はしてゐる。同じく入唐大使藤原清河に賜ふた孝謙天皇及び藤原大后の御製にも広大なる御仁慈を見る。

空みつ倭 (やまと) の国は水の上に地往 (ゆ) く如 (ごと) く船の上に床 (とこ) に坐 (を) る如大神 (おほかみ) の鎮 (いは) へる国ぞ 四つの船舶 (とも) の舳 (へ) 並べ 平安 (たひら) けく早渡 (はやわた) り来 (き) て 返言 (かへりこと) 奏 (まを) さむ日に 相飲 (あひの) まむ酒 (き) ぞ 斯 (こ) の豊御酒 (とよみき) は

反歌

四つの船早帰り来 (こ) としらか付け我 (わ) が裳 (も) の裾 (すそ) に齋 (いは) ひて待たむ (巻十九) 天皇御製 大船に真楫繁 (まかぢしじ) 貫 (ぬ) きこの我子 (あこ) を唐国へ遣 (や) る齋 (いは) へ神たち (巻十九) 皇后

誠に溢れる如き御仁慈、この大御心に感激しない者があらうか。彼等は唯大君の勅をかしこみて、大君の為身を忘れ、家を顧みず唯誠心誠意行くての艱難に立ち向かつて行くのである。後挙ぐる所の東国の鄙人 (ひなびと) たる防人の歌が、殆ど「大君の命かしこみ」に依って統一されてゐることも故なしとしない。

以上の歌は使節派遣等重大事に当たって大御心の発露を示してゐるが、平時に於ても臣下を愛撫し給うた事は自明なる事で、それは恰 (あたか) も日輪が草木を慈育するが如き關係にあり、人民は各々その所を得て生々蕃息 (はんそく; 盛んにふえる) したのである。されば人民は聖徳に感激し生ける驗 (あかし) を感じ大御代を賛歌したのである。その一例を大伴家持の歌に取らう。

秋津島 (あきつしま) 日本 (やまと) の国を 天雲 (あめくも) に磐舟 (いはふね) 浮べ 艫 (とも) に舳 (へ) に 真櫂 (まかい) しじ貫 (ぬ) き い漕 (こ) ぎつゝ 国見し為 (せ) して 天降 (あも) り坐 (ま) し 掃 (はら) ひ平 (たひら) げ 千代 (ちよ) 累 (かさ) ね いや継々 (つぎつぎ) に 知 (し) らし来 (く) る 天の日継と 神ながら我が大君の天の下治 (をさ) め給 (たま) へば 武士 (ものふ) の 八十伴 (やそとも) の緒 (を) を 撫 (な) で給ひ整ひ給ひ 食す国の四方 (よも) の人をも餘 (あぶ) さはず愍 (めぐ) み給へば 古昔 (いにしへ) ゆ無 (な) かりし瑞 (しるし) 度多 (たびまね) く奏 (まを) し給ひぬ 手拱 (たむだ) きて事無き御代と 天地日月と共に万代 (よろづよ) に記 (しる) し続 (つ) がむぞ やすみしし 我が大君の秋の花其 (し) が色々に 見 (め) し給ひ明 (あき) らめ給ひ 酒 (さか) みづき榮 (さか) か ゆる今日 (けふ) のあやに貴 (たふと) さ

反歌一首

秋の花種々 (くさぐさ) なれど色毎 (ごと) に見 (め) し明 (あき) らむる今日 (けふ) の貴 (たふと) さ (巻十九)

此の歌は天孫降臨以来歴朝が、万民を愛撫せられた事実を壮麗な言辞を以て叙述したものである。而して古来なかつた祥瑞 (しょうずい) も数多く出現して拱手 (きょうしゅ; 何もせず) して天下は泰平に治まった事を述べ、これ実に古来歴朝の御仁慈に依るものとして天子を尊んだ所に此の歌の主眼がある。此の歌は、天下泰平は善

政徳治の報であると云った思想が基となってゐる。此の思想とは明に儒教の徳治主義の影響を受けて居り、家持のみならず奈良時代の所謂インテリ階級の一般的思想であつた。この思想は日本固有の思想ではあるまいが、當時に於ては当然で、寧ろ此の表現に得意を感じて居たかも知れぬ。何れにせよ天皇の御聖徳と泰平な御代を慶賀する気持ちは十分に流露して余す所がない。かく天下は大平で仁慈はあまねく行き渡つたのである。されば海犬養岡麿（あめのいぬかいのおかまる）をして「御民（みたま）われ生ける驗（しるし）あり天地の榮ゆる時にあへらくおもへば（巻六）」と歌はしめたのである。

此の歌は聖武天皇の詔に答へ奉つて、堂々と奈良の盛世（せいせい）を賛美感謝した歌である。「御民我」は無限の皇恩に浴する自己を明かに意識した者の言葉であり、「生ける驗あり」は聖代に生を享けた者の満足と感激の声である。而して「天地の榮ゆる時に」の句には、大陸文化のを盛んに摂取し、国威を海外に伸展した国民の気宇（きう；気構え）が籠つてゐる。実に古来少ない名歌でこれも現神である天皇と御宝なる人民との親しい交流の結果である。

天地（あめつち）と相榮（あひさか）えむと大宮に仕（つか）へ奉（まつ）れば貴く歡（うれ）しき（巻十九）

天にはも五百（いほ）つ綱延（つなは）ふ万代（よろづよ）に国知らさむと五百つ綱延ふ（巻十九）

天地と久しきまでに万代（よろづよ）に仕へまつらむ黒酒白酒（くろきしろき）を（巻十九）

以上の歌は孝謙天皇の御代新嘗会の御宴に於て詔に応へて作つた歌で、ここにも天地と共に榮ゆべき御代を祝ひ、天地のあらむ限り奉仕せむとする臣下の覚悟が歌はれてゐる。此の覚悟こそ仁慈極みなき皇室に対する臣下の本懐であり喜悅であるのである。

ますらをの軛（とも）の音すなり物部の大臣（おほまへつきみ）楯立つらしも（巻一）和銅元年 元明天皇御製

わが大君物な思ほし皇神の嗣ぎて賜へる吾無けなくに（巻一）御名部の皇女の和に奉れる御歌

女帝元明天皇御即位の時蝦夷叛き、この征討の為兵士等は武を練らねばならなかつた。御代の初め出征を要することの起こつたのを、言外に歎かせられたのである。御名部（みなべ）の皇女（ひめみこ）は天皇の妹である。我が大君よ、さやうに御心を悩まし給ふな、皇神の神の御裔として生を授け給ふた此の私が、かうしてお側にお仕へ申上げて居りますものを、と。骨肉関係ではあるが人倫の大道にあつては君臣の関係にある皇女が忠誠の情を披瀝して叡慮を慰め奉つたのである。何と力強い中世の言葉であらうか。

忠義の歌

我等は既に宏大無辺の聖徳を仰ぎ奉つた。この御仁慈・聖徳の光被（こうひ；広く行き渡る）する所、臣民の道は自ら明なものがある。臣民の道は天孫降臨に当り奉仕せし諸神の精神そのまゝで、忠以外の何物でもない。而して此の精神はわが国民本来に有する所のもので、特に自ら意識して生ずるに非ず、生れながらに有する本質で、全く自然に出づるのである。

我々は先きに、我国は天照大神の御子孫である天皇を中心として成り立ち、臣民は天皇に帰一しその御心のまゝに生活した事を知つた。こゝに国民道德の根源がある。忠は天皇に絶対に随順し帰一する事である。即ち小さな我を没却してひたすら天皇に奉仕する事で、こゝに国民の唯一の生きる道があり、あらゆる力の源泉があるのである。我が君臣の関係は決して君臣の対立関係にあるのでなく、此の対立を絶した根本より発し、その根本を失はない所の没我帰一の関係である。我国は肇国以来この大道が自ら発展して居るのであつて、その臣民に於て現れた最も根源的なものが即ち忠である。こゝに忠の深遠なる意義と尊き価値とを存するのである。次に万葉集に見える忠義の歌を列挙して、我が上代人の忠義の觀念の一端を見よう。

降る雪の白髪（しろかみ）までに大君に仕（つか）へ奉（まつ）れば貴（たふと）くもあるか（巻十七）

折しも降りたる雪の真白く照り輝いてみるが如くに白髪を戴くまでに大君に奉仕して居れば我ながら貴く覚えるの意で、この歌の作者橘諸兄（たちばなのもろえ）の忠臣としての面目が躍如として現はれてゐる。

大船（おほふね）に真梶繁貫（まかぢしじぬ）き大君の命（みこと）畏（かしこ）み磯廻（いそみ）するかも（巻三）

石上乙磨（いそのかみおとまる）作、天皇の御命令通り大船を艤装（ぎそう；装備を加へる）して荒海をも漕ぎ廻ることであるの意、これに答へて笠金村（かさのかねむら）は、

武夫（もののふ）の臣（おみ）の壮士（をとこ）は大君の任（ま）けのまにまに聞くと云ふものぞ（笠金村歌集巻三）

武士たる者は何事にしても、大君の命のまゝに従ふべき者ぞと力強く臣道を強調してゐる。実に忠誠の至情を歌つてゐる。

晝（ひる）見れど飽（あ）かぬ田子（たご）の浦 大君の命かしこみ 夜（よる）見つるかも（巻三）

田口益人（たぐちのますひと）の大夫が上野（かみつけ）の国司に任ぜられた時、駿河の浄見（きよみ）ヶ崎に至つて作った歌である。田子の浦に隔てゝ富士山は雲際に聳（そび）え風光絶佳（ふうこうぜつか；、明媚な眺め）飽きることなき眺めではあるが君命は重い。この眺望の愛すべきを知らながらも、之を顧みずに行く精神、これが尊いのである。

天地（あめつち）と共（とも）に終へむと思ひつつ仕へまつりし心違（たが）ひぬ（巻二）

久堅（ひさかた）の天（あめ）知らしぬる君故（ゆゑ）に日月も知らに恋（こひ）わたるかも（巻二）

高市皇子尊の城上の殯宮（もがりのみや）の時人磨の詠める歌である。人磨の歌中の、天皇皇子の崩御を痛んだ歌の一例であるが、神の御裔（みすゑ）としての天皇・皇子に対する敬虔仰慕（ぎやうぼ；敬い慕う）の態度が溢れてゐる。前者の「天地と共に終へむと思ひつ」の思ひ切った雄大な表現雄渾（ゆうこん；堂々とした）な構想、後者の日月も知らず永久に追慕せんとする律動、この雄大さは人磨の表現態度でもあるが、亦強い忠義の精神の存在を示すものである。

次に防人や遣新羅使一行の歌中に忠君愛国の精神の流露したものが頗（すこぶ）る多いのでそれを取上げる。防人は西海の守りとして筑紫に遣された東国人である。彼等は父母と離れ妻子と別れてはるばると筑紫に下つたのである。彼等は文化程度こそ低かったが、大君の為といふ熱烈な感情に燃え喜んで出征の途に就くのである。

今日（けふ）よりは顧（かへり）みなくて大君の醜（しこ）の御楯（みたて）と出（い）で立つ吾（われ）は（巻二十）
今奉部与曾布

天地の神を祈りて幸矢貫（きつやぬ）き筑紫（つくし）の島を指（さ）して行く吾は（巻二十）大田部荒耳

召集されてゆくますらをを、賤しい者ではあるが、一介の兵として大君の為矢表に立つを無上の喜びとなし、勇み立ってゐる勇壮な心持。亦神助を信じて勇んで征途に就く丈夫（ますらを）の心を表はしたのである。千二百年の昔の此の立派な精神は時局柄吾人の脳裏に蘇り来り、我が国民精神の依り来る所の遠きを思ひ大いに意を強うするのである。防人は壮丁であるから多くは父母も妻子もあつた。然し君国の為には家族に対する恩愛の情をも顧みずして出征するのである。

大君の命（みこと）に有れば父母を斎瓮（いはひへ）と置きて参出来（まゐでき）にしを（巻二十）結城郡雀部広島

「斎瓮と置きて」とは神聖清浄なるものと祓ひ鎮めての義である。勅命であるから父母を大切に祓ひ鎮めて無事を祈り、さて兵士として出征して来た事であると詠つてゐる。何と悲壮であることか。

次に防人が大君の命をかしこみて出で立つ時の心情を歌つたものを少々挙げよう。

大君の命かしこみ弓の共さ寝か渡らむ 長けこの夜

(大君のみことをかしくみ、弓をかかえたまま寝ることになるのか、この長い夜を)

大君の命かしくみ青雲の棚引く山を越よて来ぬかむ

大君の命かしくみ受けし真子が 手離れ島伝ひ行く

(大君のみことをかしくみ、愛しい子の手を放し、島から島へと行く)

大君の命かしくみ飢宇(おう)の浦を 背向(そがひ)に見つゝ都に上る

(大君のみことをかしくみ、大の浦に背を向け、都にのぼる)

大君の命かしくみ出て来れば 我(わ)ぬ取り著(つ)きて云ひし子等はも

(大君のみことをかしくみ、出ようとする 我にしがみつき云う子等も同じ気持ちだ)

大君の命かしくみ磯に触(ふ)り 海原(うのはら)渡る父母(ちちはは)を置(を)きて

(大君のみことをかしくみ、磯伝いに海を行く 父母を残して)

畏(かしこ)きや命被(かが)ぶり明日(あす)ゆりし 加曳(かえ)が斎由嶺(へゆね?)を妹(いむ)無しにして

(みことをかしくみ、明日からは野山(草と共に)に寝る 妻もなしで)

大君の命恐(かしこ)み大船の 行きのまにまに宿りするかも

(大君のみことをかしくみ、大船に乗せられ、そのまま停泊するのだろう)

国防の大任を負ふて遠く西海に赴く兵士等の心情と、東国人が如何に勇猛忠良の兵士であったかが実によく現はれてゐる。特に二番目の歌は方言が多く、越えてを越よて、来ぬかもを来ぬかむと歌つてゐる。かやうに方言がその儘伝へてあるので地方色がよく現れ、却つて東国人の醇樸(じゅんぼく; ナイフ)の情をよく写し得てゐる。

万葉人は東方僻地の一兵士に至るまで忠の精神を持ってゐた。本来万葉集の歌は日常変化少き生活の上に詠み出されたものが多く、為に内に潜める忠義の情を特に詠いあげる機会に乏しかった。防人の場合の如きは特殊な事情で割合国民精神の発露が顕著に見られたが、他にも多少の突発事件が起り、非常の時に如何に忠義の念が顕現されたかを見るに足るものがある。

ますらをの軛(とも)の音すなり物部の大臣楯(おほまへつきみたて)立つらしも(巻一)和銅元年 元明天皇御製
わご大君物な思(おも)ほし皇神(すめがみ)の嗣ぎて賜へる我無けなくに(巻一)御名部の皇女の和へ奉れる御歌
女帝元明天皇御即位の時蝦夷叛き、この征討の為兵士等は武を練らねばならなかった。御代の初の出征を要することの起こつたのを、言外に歎かせられたのである。御名部の皇女は天皇の妹である。我が大君よ、さやうに御心を悩まし給ふな、皇神の神の御裔として生を受け給ふた此の私が、かうしてお側にお仕へ申上げて居りますものを、と。骨肉関係ではあるが人倫の大道にあつては君臣の関係にある皇女が、忠誠の情を披瀝して叡慮を慰め奉つたのである。何と力強い忠義の言葉であらうか。

天地を照らす日月の極みなくあるべきものを何をかおもはむ(巻二十)

この歌は孝謙帝に対し当時皇太子にましました淳仁帝の御詠みになった御歌である。橘奈良麿の乱の直後で、我大君の大御世は天地を照らす日月の如くに極り無くあるべきものであるから今はた何をか憂をせむやの意である。かゝる事変に遭遇して、宝祚の隆なること日月の照らす如く極りなくあるべしとの意識即ち真の国体の尊厳なる所以が自覚・強調されるのである。

大君の命かしくみ大荒城(おほあらし)の時にはあらねど雲隠ります(巻三) 神龜六年

此の歌は倉橋虫麿が讒言(ざんげん)に遇ひ自尽(じじん)された左大臣長屋王を歌つたものである。大荒城とは新喪(にひも)の祭である。皇命により未だ命を終るべきに非ずして、急に逝去せらるゝ由を無限の哀悼の情を寄せて歌つてあるが、少しも怨嗟(えんさ)に亘(わた)つてゐないのは注目に値すると思ふ。少しも不平怨嗟

の声を発せず、ただ皇命の止むなさに此の世を去って行くその心情、これを忠と云はずして何を云はうか。

次に古代人が国土を如何に見てみたかを見よう。

大君の遠(とほ)の御門(みかど)とあり通(がよ)ふ島門(しまと)を見れば 神代し思ほゆ(巻三) 柿本人麿
人麿が筑紫に下った時海路にて詠んだ歌である。島また島、海峡また海峡、瀬戸内海の美しい航路、今しも船は島と島との間の水路にさし懸かる。丁度邸宅の門戸の如き感じである。それも我大君のまします宮城の遠の御門と見てこそ如何にも適当である。それにしても此の島戸は国生みに当たって国土を統治せらるべき天皇の遠の御門として作られたのであろう。今ここに来てみれば悠久なる神代のことも慕はれて、我国の神国なる所以も考へられる。人麿の歌は尚古的で、この歌にしても神さびた風景によって古を思ひ、わが国土を神の国と観じてゐる。彼の心は渾然として神のなかに浸っている。

やすみししわが大君の食國(をすくに)は大和も此処(ここ)も同じとぞ思ふ(巻六) 大伴旅人

これは旅人が太宰府に在って、或人が「さす竹の大宮人の家と住む佐保の山をば思ふやも君」と問うたのに対して答へた歌である。かの大和の国もこの筑紫の国も同じく大君の領土であつて、その間に何等の相違はなく、假令(けりょう;たとえ)辺陞(へんすい;辺境)の地に居ても奉仕の情に变りのない旨を述べてゐる。如何に都を離れても日本人の居る所天皇の御稜威(みいつ)の普(あまね)く行き亘(わた)らざる所なく、普天の下・卒土の浜(天のあまねくおおう所・地の果て)王土にあらざるは無しの精神が吐露されてゐるのである。ここにも国土観を通して忠義の精神が表はれてゐる。

以上の如く色々な方面から古代人の忠義の精神を見て来たのであるが、惟(おも)ふに我国は、国家の構成・国体の淵源遠く神代にあり、日本民族の成立の歴史は即ち国家の歴史であるから、忠義心は祖先以来泌(にじ)み込んでゐるのである。こゝに根底を有し発して以上の如き歌となつて表はれたのであるが、一旦国家の非常時に際すれば、内に潜(ひそ)めるものが閃(ひらめ)き出て忠勇義烈なる精神が発揮されるのである。非常の場合でなくても折りにふれて、内に秘められた忠誠心は大きな叫びとなつて心の底からほどぼしり出るのである。

千万(ちよろづ)の軍(いくさ)なりとも言挙(ことあげ)せず取りて来ぬべき男兒(をのこ)とぞおもふ(巻六)

藤原宇合(ふじわらのうまかい)卿が西海道の節度使に派遣された時、高橋虫麿の作った歌である。よし敵は千万の大軍であつても、言に出してとやかく云ふまでも無く、退治して来る勇士だと思ふという意である。何と力強い歌であらうか。千万人と雖もわれ行かむの概があり、軍人の征途に赴くを送る歌として実に千鈞を挙ぐる力がある。事に当たつて言挙げをするのは卑怯未練の者のなすことであり、日本人のなすべからざる事である。幾万の敵なりとも何等申出をせず討伐すべき男兒と思ふぞと歌つた心持は、忠誠心溢るゝ上代人の心意気であらう。

大伴(おほとも)の遠(とほ)つ神祖(かむそ)の其の名をば 大久米主(おほくめぬし)と 負(お)ひ持ちて仕(つか)へし官(つかさ) 海行(か)ば水漬(みづ)く屍(かばね) 山行(か)ば草生(くさむ)す屍 大君の辺(へ)にこそ死なぬ 顧(かへりみ)はせじと言立 大夫(ますらを)の清き其の名を古(いにしへ)よ 今の現(うつつ)に流さへる 祖(おや)の子等ぞ 大伴と佐伯(さへき)の氏(うぢ)は 人の祖の立つる言立 人の子は祖の名絶たず 大君に奉(まつ)ろふものと云ひ継げる事の官(つかさ)ぞ 梓弓手(すしゆま)に取り持ちて 劍(つるぎ)大刀(たち)腰に取り佩(は)き 朝守り夕の守りに 大君の御門(みかど)の守り 我を置きて又人はあらじと いや立て 思(おもひ)し溢る大君の御言の幸(さき)を聞けば貴(たふと)み(巻十八)

此の歌は陸奥の国から金が掘り出されたのを皇室に献上した時、それをお祝ひ申上げた大伴家持の歌である。元来大伴氏は神武天皇の建国創業を翼賛(よくさん)し、宮廷警護の大任に当たつた道の臣の子孫で代々武門の

家柄であった。されば此の歌も示すが如く熱烈なる尊皇心を以て皇室奉仕に当たって来たのである。

偕(さ)て此の歌はお祝の歌であるのに、寧ろ自分の家の事を中心とし強調してゐる。当時は万葉末期で、最高調期たる人麿の時代とは非常に傾向が変わって来たのである。即ち人麿時代は伝統的精神が統一的綜合的に歌はれたが、次第に儒・老思想も影響を与へ分化し沈潜して来て、前の包括的帰一的歌人に対し、現実的自覚的歌人を生んだ。先述の如く天皇観も現実的に変ったが、かういう現実性が明瞭になるに従ってそこから人生に対する種々の新傾向を生じた。即ち国家を中心としてその下に氏族や家といふ觀念が起り、更に人間性の意識が起って居るのである。此の現実的精神が発展して家持の此の氏族忠臣の歌となったのである。かくの如く進歩的な合理的思想に依って自我意識が強くなってゐた事は、一面時代の思潮で拒む事は出来ないが、人麿の態度と比較する時非常なる差が生じてゐる。即ち人麿の一元的帰一的に対し二元的対立的である。前者は天皇の中に自己を全く没入したのに対し後者は我を意識し我の名誉幸福を思ひ全く融合し得ないのである。

しかし皇室に対しては素より人一倍尊崇の念を抱いて居り「海行かば水漬く屍・・・」と叫んでゐる。これは大伴氏のみならず他の氏族も同じ精神を以て奉仕して来たであらう。然して亦「朝守り夕の守りに 大君の御門の守り 我を置きて又人はあらじ」と。以て自ら国家の護衛を以て任じてゐる大伴氏の忠義を見ることが出来る。同じ精神は大伴家の為に衰へてゆく運命を悲しんで詠った家持の喩族歌(うがらをさとすうた)にも見出されるが繁(はん)を厭(いと)ひて省略する。

以上歌を以て万葉人の忠義思想を見て来たが、これを要するに二つは大別出来るかと思ふ。一つは国体観・天皇観の名題の下に示した種類の思想で、それは神を敬ふと云ふ精神である。人麿の繰返し詠う所の「やすみし わが大君の神ながら神さびせず」の思想や憶良の「倭の国はすめ神のいつくしき国」と云ふ言葉である。一言にして云へば日本は神国であり、天皇は現(あき)つ御神であらせられるといふ国民的信念である。斯くの如き敬神の思想から、一切の行為は神のみことによって行ひ神に帰一合一する精神が生まれたのである。かくて敬神は国を愛し天皇に忠節を尽す所以であるのである。

次には直接敬神に触れないで、寧ろ天皇の臣民に対する御仁愛に対し臣民は忠節を尽し天皇には仕へまつるのである。これが「忠義の歌」の部に納めた所のものである。素より万葉時代は大体平和な時代であった。されば近世勤王歌人のような烈々たる一死報国の情に燃えるような歌は少ない。寧ろ国の平安な時代に国民として 民として 忠節の情を詠った歌が多い。併(へい)し一朝事ある時は一部の歌が示す如く、大君の為身を鴻毛(こうもう)の軽きに比すといふ覚悟は常に有してゐた。その覚悟を胸中に深く抱いて平和な御代に対して明るく朗らかに忠誠の情を詠ひ、愛国の精神を披瀝したのが万葉歌人であった。

結び

上は天皇から下は防人に至るまで挙ぐる所の歌五十余、以て万葉人の国家意識を究明せんとしたが、遂に何等理論的結論に至らず、上代人の情感生活の一端を味ふに過ぎなかった。しかしこれらの歌を熟読し得て、吾人の遠き父祖達の魂に触れた事は大きな喜びであった。上古以来の純樸な国民が大陸文化に接して自覚と成熟の域に達した時代の国民精神を さながらに感ずることが出来たのだ。新興の意気に燃える万葉人の澀刺たる感覚・素朴な精神生活は直情のまゝに流露し、理智によって感情の弱められることがなかった。ひたぶるな心を以て真実そのまゝに詠ひ上げられた所に 高潮せる不滅な国民精神を見、その真実に打たれるのである。特に忠義の歌にその真面目をみたのである。私は万葉人の生活は“まこと”の生活であつたと思ふ。此の精神が時ありては強烈な忠義の歌となり勝(すぐ)れた芸術品となる。されば万葉を通じてひたぶるな“まこと”の精神は、文化が頽廢に陥る毎(ごと)に復古的精神として現はれて来る。実朝と云ひ、契沖・(徳川)宗武・(賀茂)真

淵といひ良寛・(橋)曙覧と云いひ、宣長の古事記研究と云ひ、近くは子規の写生道と云ひ、因襲虚偽に陥るごとに理想的精神と結びついて万葉の精神が蘇るのである。現実にあきたらずしてこれを改善せんとする理想的精神を持つ時、常に蘇るのが万葉の精神である。今日の時勢は明治以来思想混乱の極所に至り遂に大事変を惹起(じゃっき)した。然して古代儒・仏・道混入せし時代の如く西洋思想はとうとうとしておしよせ、国民精神は混乱頽廢し、正に思想轉換期に立っていると云へる。

此の非常事態に際し、国民精神に純一の方角を与へるものは、祖先以来のわが国民の心に流れてゐる日本精神の特質を見窮めることである。此の意味に於いて万葉精神は大いに復活させられるべきであり、現代日本を救ふ指導精神として一つの債務を負はされてゐると思ふ。真に健全に現在を生きようとする者は、

万葉歌中に叫ぶ祖先の声を聞くべきである。然して多様な紛糾が一に帰し、新たなる日本精神の組織的建設の近からんことを切望するものである。

契沖

契沖、賀茂真淵、本居宣長の対座画像 (東京大学史料編纂所蔵、[HP](#))

宣長

真淵



<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:契沖、賀茂真淵、本居宣長対座画像.jpg>

一、父への便り 10通

昭和 ・・・前略・・・蚕はどうか、大変お忙しい事と思ひます。一学期も後一ヶ月となりました。・・・私が
10年 剣道をやめたのを御心配になつてゐる由ですが、それで体が弱くなる様な事は絶対にありません。
6.9 適当に練習する事が許されないので運動量が多すぎ授業にさしつかへるからで、私は自分で適当に
運動してゐます故御心配いりません。授業はととも進みました。

独語は恐らく中学校の英語で二年程度でせう。私には歴史・地理・国漢特に歴史に大きな興味が
感じられ始めました。昨夜教育会館で楠公（なんこう）の大講演会が高校主催で開かれましたが、隆
教授の建武中興を生める力、小川教授の楠公精神と防長精神の大論説は実に私をして胸のすく様な
感を起こさせました。下略

同年 ・・・前略・・・車中恙（つつが）なく無事到着しました。今日受持教授より一学期の成績発表がありまし
9.10 たが、吾クラスが全校最悪の由、然し文乙の悪いのは例年のことで次第よくなるとか、一番から三
番までの成績は八四・七八・七七の順で一番は一浪、二番は三浪で三番が私でした。今のままでは
落第が一六名とか。私はこちらに帰ってからは休暇中とは全く変つて勉強に一路邁進してゐます。
防長教育会の貸費生がクラスから二人出ました。講堂の仕事はどのように進んでゐますか。下略

同年 今日突然武学生養成所の生徒の世話をして呉れないかと云ふ事を、現在そこに居る文三乙の田坂先
9.12 輩を通して相談を受けました。前の関係からでせう。是非来て欲しいとの事です。又小川先生も私
なら適任だと云はれた由、・・・思ふに二年の時は至つて暇がある時故、余り学業に差支へを生じない
し面白くもあり又修養にもなり、何か体験上有意義な事を得さうな気もして、二年の時だけ引受け
るのもと考へて見ました。現に田坂先輩は実に立派な人物で全校一の模範生なる由、実際は行って
見たいのです。然し一方、志賀家では唯の十円で実は勿体ない極楽の様な生活をさせて頂き、三年
間良く世話をしてやらうと、憎からず御心配下さる好意に対しても、又入所の実体がうんと良くな
ければ行かぬ方が良くだらうと云うどちらかと云ふと反対の意見もあります。この五年間養成所か
ら一人も幼年学校に合格しなかつた由、引受けてまた通らなかつた時の責任のこと、食費は自弁で
補助は八円余りである為差引三・四円自弁となる由ですから、此の場合お断りした方が良くとも思
ひます。来春まで良く考へて呉れとの事です、御意見をお伺ひ致します。

昭和 最近自分の至らぬ事を痛感、如何にして此の重要な時期を過すべきかを考へます。最近学校の勉強
11年 は幾ら努力してやってもそれだけでは皆について行けぬと思ふ様になりました。席次は上でも自分
4.27 の学識の不足をつくづく感じます。学課の大切さは知つてゐますがそれは生きた学問でなく、世俗
の事は問題外として、自分が無思想でつまらなく感じられ、対話でも堂々と信念を以てする事が出
来ぬのを悲しみます。これは読書の不足から来る事で、元来実力の乏しい自分が成績にとらわれて
ゐることに起因すると思ひます。仲々読書の暇が出来ませんが、如何にかして確乎たる信念・人格
或は思考の力を獲得したく、今まで否定してゐた寮生活・バンカラを再検討し且又哲学・宗教を考
へて見たくなりました。二年になり学課も骨のあるもの多く、語学は高度になり予習も追つかぬ有
様です。先週日曜萩へ桜見に行きました。下略

同年 新聞で大変驚かれたと思ひますが、今朝三時半高等学校のあの大きなL型の一角から出火、遂に本
10.28 館全部が唯南に面した端の一部分のみ残骸を残して灰燼に歸してしまひました。幸に風なく本館の
みで講堂・図書館・他の特別教室は残りましたが、深夜の月空をこがしてあの大きな建物が水の力

も全く効目なく、燃え上がり崩れ落ちる様を見つめて本当に涙が出ました。丁度試験初日に当たる日で、消火に努める我々も疲れて元気がなく、張り切った気力も失せて、云ふに云はれぬ感情が迫って参ります。一番お気毒なのは小川先生で、一生の事業として集められたあの立派な考古学教室同じく古文書は一物も残さず、今は魂を取られた様になられ、先生がさびしく微笑してられるお姿です。どうも私達の教室から出火したらしく、漏電が然らざれば試験を怖れての放火で、丁度先年ストライキの起こった日に当たります。中間試験は中止 31 日から授業開始となりました。此の事件の為真の自覚ある人は異常な緊張を以てずんずん伸びて行くでせう。私もその一人として維新の志士の如き気魄で押して進んで行かうと思ひます。下略。

- 同年 ……29 日鎮火後一同校庭に集合、校長の血の出る様な叫びを聞き其日一日の休養を命ぜられました。
11. 01 二時間しか眠っていない私は持出しや警備に全く疲れ切つてゐましたが、平素の小川先生の恩義に感じ何かお手伝ひをと亦出校、其の日は珍しい大火とて見物人陸族(りくぞく; 連なる様) 見舞客も多く小川先生らは玄関で受付、小川先生に対する同情の声が一番多かったのですが、私は早速小川先生から京大三宅先生への打電を頼まれました。一時間睡眠をとり稍(やや) 元気恢復(かいふく)、午後小川先生の弟子に混って発掘、未だ所々焼けている土灰の中から探し出した石器・土器片を一々説明、これは明治帝の天覧を仰いだもの、これは何処産でいつ頃のもの、どの位の価値のあるものだと丁寧に説明される先生の心情を思ふと全く涙がでました。私にも非常に勉強になりました。此の日一晩熟睡翌日勅語奉読式、私は此の式程厳肅な式は近頃経験した事がありません。

校長は今回の失火に就て全く不忠の臣として申訳ない、これ全く自分の不徳の致す所で深く諸君に御詫びする、諸君は身体に十分気をつけて大いに勉強して呉れ、再び松下村塾に立ち返つてその意気で進まねばならぬと。生徒主事に続き小川先生も、学界に雄をなす自分の魂たる標本を失った事を残念に思ふ。然しかゝる物を失ふよりも全く献身的に自分の手伝をして呉れる者を此の中に見出した事を嬉しく思ふ。自分は是によって勇気づけられた。自分は今から亦この建設に一生の魂を打ち込む由涙を以て語る。一同頭を上げ得ず。泣いてゐる者も多かった。私も嬉(うれし) くなり感動した。午後の仕事の分担も皆が進んで参加を誓ひ、夜の不寝番も十二名の募集に申込は百名を越え、私も夜の 12 時から朝 6 時迄を引受けました。此の式に於て真の人格の尊さ偉大さを感じると共に、やる時はやると引き締まって呉れた全校生を見て流石高校生だと非常に嬉しく思ひました。佐藤先生から交友会誌原稿の焼けなかった事を聞き安心しました。午前中は今はなき校舎の写真を探して写真屋廻りをし、午後は全学生続々集まり僅か三時間で跡片付け、文字通り真黒になり玉の汗を流しました。私は終了後小川先生指揮下に昨日の作業を継続し、四割位出て来ました。三時間半寝て夜警に出ましたが、先生方は不眠で見廻りされ天幕の中で火を囲んで先生方と話し非常に親密になりました。私にとっては一生忘れる事の出来ない歴史的事件となりました。中下略

- 同年 ……大火以来二週間以上も経過しましたが、未だに当時の感激を忘れ得ず、強い信念のもとに決心通り着々と真の学問の道にと歩みを続けてゐます。大火は唯一の一大不祥事ではなく、私には非常に歴史的に意義のある事件であった。私の眼界を一時に押し開き、眠つてゐた心と呼び醒まし、活動機能を与へて呉れました。…11 月 2 日立派に授業が開始されました。甲乙が特殊課目を除いては合併で行はれ、教室には講堂が充当され、皆の態度はがらりと変わつて真剣そのもの、諸教授の日常に倍した熱意のある講義は私達を感動させ、一致団結して難局に当たらんとの誠に純なる山高精神が発揮されてゐます。授業に併行して一人一人が寮で警官の訊問を受けました。

何と云っても一番大きな収穫は小川先生との魂の合一で、先生と行動を共にし、先生の意見感想を聞き抱負を知る事によって、如何に眼（まなこ）を開かれ自覚を高められた事であろう。先生から開校当時の不便さ、創学の自覚から生まれた有為な人材の輩出振りを聞かされ、現在の境遇と思ひ比べ、再興の確乎たる決意を以て頑張れば、第二の山高精神建設と共に偉大な人材の続出の必然性を信じる事が出来、この意味で此の期に大火に遭ったことを幸せと思ひます。改めて若い時に禍（わざわひ）に会う事の幸福さを痛感し、私は何時もお前は唯の机上の学問をしてゐるだけで全く何の役にも立たぬと叱られて来た事を回顧し、本当にそうだったと思ひました。

勉強の態度が間違つてゐた。死学ではならぬ、現在に生かさねばならぬ。単に論議や古い事を知るのではなく、それを以て現在の指導原理を把（つか）む事が大切である。そしてこれからの生活をこの原理で貫かねばならぬと。山高の為に、松下村塾にもたとふべき校舎と、志士を自認する生徒と、松陰たる先生と、三位一体になって精神文化復活発展に乗り出さんと、真に心から決心しました。更に同夜は五人で小川先生に招待されました。

レコードを聞き肉鍋を囲んで話は尽きる処がありませんでした。先生・先輩の中に入って話す事によって啓発される処が多々ありました。此の夜帰つて自分の進むべき方向なすべき仕事を考へ、自分達の受け持つてゐる交友会誌の充実・短歌会の発展・後を委（まか）された史学同好会の充実・毎週の特別講義及読書会の実施等具体案を練りました。同時に今夜の話により読書の不足を痛感し読書慾が猛烈に起つて来ました。11月4日は橋本先生を訪問、火鉢を囲んで話を聞く、学校の教課は将来の常識、おろそかにすべからず、されどこれに追はれ他の読書に手が届かぬ様では将来学者として立てる見込みなしの訓（おし）へ、心に滲み通る。人間は信念が必要。それは徹底した学識の裏付けを要す。人間は苦痛が必要なり。反撥心は汝を玉となさんの教えと共に有難く思ひました。

5日には夏休中の短歌の批評を聞くべく小川先生を訪問、有益な指導を受けました。かくて学問に読書に文化運動に努力してゐますが、特に読書慾旺盛で深夜二時三時の及び生き甲斐を感じます。「学生生活（河合）」「東洋思想史」「西洋思想史」「哲学概論」を読破しましたが、つくづく中学五年を経過しなかつた事が今日の遅れの原因である事を感じると共に、今迄の勉強の仕方の誤り即ち良い成績を取る為に所謂点取虫になつてゐて、学習が教科書に固定して、学問と教養を高め人減形成の為にする態度に乏しかった欠陥に気付きました。最近予定されてゐる三日連続の野外教練では、元気を出し浩然の気を養ふつもりです。

初めは21日頃帰省のつもりでしたが校友会誌発行の仕事もあり、汽車賃も相当高いこと故、今回は中止の積りです。小川先生を中心とした同封の写真は実に記念すべきものです。無帽の大学生に武学生養成所にゐた田坂先輩で尊敬すべき秀才です。今一人の大学生は松崎先輩、高校生は私を除き文三乙で皆優秀な先輩ばかりです。興からも仲々しっかりした内容の見舞状が来ました。中下略

昭和
12年
5.26
拝啓、昨日中間試験を終りました。三年になると縁遠い、学課もなくなり、割合容易になつたので殆ど一夜漬けでやりました。丁度山口中学校の試験と重なり、一年生には最初の試験なので多少手心を加へる必要があります、準備の暇が充分なく、独語は範囲が広くて手が届き兼ねましたが、他はかつがつ出来たように思ひます。今年の三年には文学部志望が五・六人ゐますが、大学入試率は困難でないにしても、出題が各学科を網羅して居り亦実力の有無は入学後他学部と較べ比較にならぬ程重大な影響を持つので、お互いにこつこつとその方面の勉強に専念してゐます。しかし大部分の

法・経学部志望者は入試が唯語学一科目だけなので、一部の者を除けば必然的に語学のみ専念するといふ結果になります。従って率は困難なるも此の点に於て楽な彼等は全く功利的になりつゝあつて、唯語学をやれば事足りるとなし読書も止めて唯語学にのみ汲々としてゐます。今度の試験でも早くから準備をして得々としてゐるのですが、私には首肯（しゅこう；うなづくこと）できません。

勿論吾々には学問が第一でありそれを通して知徳を鍛錬するのですが、試験は吾々の勉強の跡をまとめ成果の程を見るのであつて、勿論試験は大切ではあるがそれが吾々の総てではないと思ひます。唯成績・点のみ追求する傾向は寧ろ軽蔑すべきものと思ひます。唯学科にのみ専心する者でもこつこつとやりそれに信念を以て一步一步を築いて行く者には狭いながらもまだ首肯出来る所があります。しかし中には恥ずべき巧みなカンニングに依つて誤魔化すが如きは、点数は取れても何の価値もなく、自ら墓穴を掘りつゝあるものだと思ひます。準備の出来ない事は自己の責任であるが日常を真剣に修学し、高校生らしく大きい理想を持って、必要な読書なり学習なりに依つて、有意義に日々を送る所に吾々の進むべき道があり、かくしてこそ正しい試験が受けられるのであると思ひます。

今日「心臓が強い」といふ言葉が学生間の流行になってゐますが、これは実に功利主義の反影であると思ひます。勿論自己の発表主張の出来ないような事では駄目ですが、此の言葉はずうずうしくも、合目的々に他人を押しつけて多少の道徳的な非行は構はぬといふ考へが主体となつてゐると思ひます。三年になつて皆こんな傾向が強くなつて来ました。…高等学校以上の学校では信義を以て結ばれた交友関係は極めて少ない様に思ひます。学生が余りにも社会人になつてしまひました。

…功利主義の糟を嘗めて来た私は相当彼等に調和出来る人間にもなりましたが、此の風潮には猛烈なる反抗心を持ってゐます。今度の試験でも不幸にして準備の時間は少なかったのですが、二週間も前から準備した者とそれ程の差はなかつたと思ひます。彼等が成績にのみとらわれてゐる間に、先生の特別授業も受け「大学」と「古事記」の三分の一ばかりを独習し、歌も作れば其他目に見えない読書も養成所の生徒に接する傍（かたはら）なし得ました。一年の時の如き成績は一年の時の如く勉強することに依つて得ることは出来ます。しかしそれは結局狭い頑迷な自分を作ることであつて、当時私には読書の暇も仲々ありませんでした。

高校生活の内情を理解すれば、席次の良い者必ずしも良き学生ならずして席次の良き者の内から毎年二・三名づつ容易だと思はれた入試に失敗する悲劇が見られるのは前記の勉強法の缺陷ではありますまいか。将来に向かつて大きく深い自己を作るべきだと思ひます。私には良き成績を取らんとすれば色々な独学・短歌等を止める外ありません。一般に対抗する為に学業にのみ専念することは、将来の為の自己の滅亡であり、臆（やが）ては私の軽蔑する人間への墮落となりませう。現在の優を以て以前の成績を取り返すことは恥しい事ながら殆ど出来ないと思ひます。二年の時は人の道・色々な文化運動等に依つて多少とも無駄な時間を消費してゐますが、現在の私は無駄のない充実したものだと思ひます。一般人のおろそかにする人間的修養もしつゝあると思ひます。私には現在の程度でしっかりと実力の養成に努める事が妥当してゐると思ひます。私の考への一端ですが間違ひがありましたら御叱責を受けて直して行きたいと思ひます。…

祖父の御病気には皆様も御心配の事と思ひます。悪い病とは云へ我一家の鎖の一つとして努力されたればこそ今日の一家があり私もあるのでありますから、心から御慰め申上げると共に私達も受け継いだ一連の鎖の一環として大いなる努力をなすことこそ私の努めであると思ひます。

昭和 ・・・三日の発表に依り試験は 14 日午後身体検査、15 日午前国漢午後西洋史、16 日語学となりました。・・・上京は 11 日午後 2 時 6 分小郡発の急行に決めました。友達と一緒にです。旅費は手許にある
13 年 金で間に合いますので御心配いりません。同封の防長教育会貸費借用証の処理をお願い致します。
3.5 下略

同年 いよいよ試験が間近になりました。西洋史は分量が多くて準備も仲々進捗致しませんが、かつがつ
3.9 ものになりさうで御座います。志賀家に先日お伺ひ致し餞別五円を頂戴致しました。亦養成所の子
供等のお世話仕甲斐があり、先づ一人幼年学校にパスしました。閣下から慰労金として二十円頂戴
し、又 10 日夜には送別の宴を開いて頂くことになって居ります。三ヶ年又一ヶ年の結末がつき意
を安んじて上京することが出来ます。幸いに志気極めて旺盛、大いに頑張りたいと思ひます。金の
処理には十分注意を致します。安着直ちに電報を致します。皆様の全快をお祈りするとともに殊に
母上への看病の程願上げます。



旧制山口高等学校



講堂



一、 昭和12年日記抄 — 青春のわが心の軌跡

- 昭和12年 今年是我的高校生活中最も意義のある生活の送れそうな気持ちがあるし亦そうあらねばならぬ年である。中学四年入学（旧制中学は5年制）の私にとっては、一年時代は未だ高校生活の意義を把握する学識なく、二年の二学期に至り漸（ようや）く真の高校生活に入り得たのである。即ち私は他の者よりもその自覚の期が遅れてみたのである。この故に真に充実した生活の年は実に此の一年、然り、二年の三学期と三年の一・二学期であらねばならぬ。地域社会の私への期待は誠に大でその重任に自ら感奮興起（かんぶんこうき）、地を蹴り、土を巻いて此の与望（よぼう）に答へんと努力してゐる。しかも社会の私に対する評価は実に不当の名声を与へてゐる。この全くの不計之誉（はからざるほまれ）に添ふべく努力し正当な評価たらしめねばならぬのである。今日はこの意味に於て誠に考へさせられた日であった。三時より十一時まで参拝者実に多く色々な人に元日の挨拶を述べたが席の暖まる暇がなくその為確乎たる自己の姿を見返る余裕がなかった。真に神に仕へる心になりゐたか、神職の子たる気品を保ち得たか、二十といふ青年になったといふ自覚、上田家を再興せんとの志が発現されたか、崇敬者に対し真心の欠けたる点はなかったか。
- 1.2 小野川先生に招かれ午後先生を訪問。熊本校長、泉少佐、山崎猛、斉藤医院長、と会し痛飲快談した。此の中で私は最早一人前の道を行ひ、立派に応接し得る力量を具（そな）へて来たことを自覚した。
- 1.4 人丸神社に参拝、参籠会に参加。準備に小川先生の「国体観念発展説の神道的考察」及び加藤玄智著「神道再認識」を読む。参籠会は祭典後会員50名による祝詞共読・神楽奉奏・熊本校長による静座・熊本校長の講演・白鳥学務部長講話・座談会と続き有益であった。神道の特色特に神人合一の境地の重要性を痛感した。
- 1.7 出山
- 1.10 短歌会 先輩二人を迎へ大論争。短歌観賞のあり方を悟る。当日の作
なだらかな冬枯草の山の峯に夕日の照りて寒さきざしぬ 上田
- 1.16 大津中学校会送別会開催
- 1.17 先日由道会幹事・顧問より全会委員就任を懇願された。考へて見るに実力はなきも今年度山高文化団体の総帥たる位置に居るのは小生で、中心たる雑誌部の外史学同好会・短歌会・由道会に席を連ね誠に連絡を取りやすい状態にある。彼等は小生を利用して由道会をより有意義な団結強固なものたらしめん方針であるらしい。そもそも由道会は往年の赤化運動華やかなりし時代、これに対抗せんが為に生じた所謂右翼団体の一つであったが、赤化思想の根絶された今日に於てはその存在意義を失ひ、消滅するかその内容を変更すべき時期にある。こゝに於て由道会の将来を考ふる者は当然会の根本内容・趣旨を再検討してこゝに一大変革を加ふる必要を認めるに至った。私もその趣旨に賛成してこの任を引受けた。
- 1.19 岡倉天心の「茶の本」を読んで感動する。
- 1.21 読書会設立の件に関し小川教授宅訪問。指導者を先生に断られ堀教授を推挙さる。
小川先生から小生の人物評を聞いて参考になった。明るい感じ、人に好感を持たれるいゝ感じがある。これは歌に非常によく表れてゐる。竹を割った様な新鮮な率直さ、型破りの新しさがあってすくすく伸びんとしてゐると

- 1.22 冬休中の短歌に就ての批評を小川・佐藤両先生より頂く、有難き事也。
- 1.23 橋本教授御令息誕生を祝し、特講を受けている五人五円の酒巻贈呈。就職状況の話聞き、学者として立つべき力なくして借金をして勉学を続けることは間違いではないかとつくづく反省させられた。
- 1.24 武学生養成所に行き藤田中将に会ふ。夜小川先生を訪問し先生より武学生養成所居住の件に就き大いに励まされる。
- 1.25 由道会幹事来り、小生に幹事就任を懇請。私は元来非由道会的な立場にあり、亦先に委員を引受けた私であり、更に武学生養成所に入らんとしてあるのであるから、私は立派に断らざるを得なかつた。何と云つても私は余りにも広く手を広げ過ぎてしまった。
- 1.26 武学生養成所に行き、遂に家庭教師を引受けねばならぬ様になり29日父に電話し武学生養成所入りを正式決定。志賀家に居るのに較べ条件は何もかも悪くなるが、このまゝでは人間が出来ないと思ふ。今迄の順調な行路を自ら清算して男らしく苦しい生活の中に己が身を投げ込まんとするのだ。これではなくては何の成功があらうか。私の腕の奮ひ所だ。我と我が力を試みて呉れん。自治の精神は自ら高揚されて、真に眼の開けた人間が発現しつゝあるのである。
- 1.29 短歌会
- 1.30 武学生養成所に移転、夜玉重氏との交代の歓送迎会をして呉れる。
- 2.1 深刻に反省せざるを得なくなつた。人を指導する立場に立つてこそ自分を本当に振り返るものである。教へるは習ふの半ばであるとは実に名言である。私は如何に力のない人間であるか。腹の据つてゐない人間であるかを痛感した。人を指導する上に於て人からなめられることは一番つらいことであるが、これは腹の据つてゐない所から生ずるのである。余りしゃべらぬこと、威厳を保つこと、真に彼等を愛すること、小さいことでやかましくしゃべらぬことが肝要だ。
- 2.2 堀教授宅で第一回読書会開催。テキストは阿部次郎の「地獄の征服」である。
- 2.4 生徒に「神社参拝の意義に就て」講話する。
- 2.8 また由道会幹事就任を懇望された。私は雑誌部・短歌会・史学同好会・読書会・由道会・共済会の委員を一人で引き受け、更に武学生養成所の指導生として生活してゐる以上到底不可能なことである。しかし私が此の任を引受けない限り由道会はずぶれないまでも存在の意義を失うと云ふ。石村教授には義理もあり困つたものだ。
- 2.10 山田陸軍士官学校パス。年二回読書会、読書力の不足を痛感す。
- 2.12 第28回短歌会
- 2.15 諸教授間の解体論のなかで遂に由道会幹事に就任、但し由道会の方向転換を条件として・・・暴力的側面打破・文化的教養的方向へ。
- 2.18 石村教授より新聞に報道された由道会方向転換に就て聞き匡され激励さる。夕方特高警察の者が真相を聞きに来た。要点はあの暴力的な団体が果して文化的運動へ転換可能か、亦その実行方法は、今回の映画館事件・朝日写真館事件に対する会員の行動とそれに対する幹事の考へ、一方校内気風の動き・教授間に派閥対立なきや等であつたが、私は一々明快に返事を与へた。かくも注目されることは一面嬉しいことではあつた。私の投じた由道会自縮方向転換の一石は当分波紋を拡げることとならう。
- 2.23 小川先生より武学生養成所生徒指導其の他に就て懇切な個人指導を受く。

- 2.24 臨時山高共済会総会開催、食堂部5銭値上げに賛成す。
- 2.27 試験との苦闘生活終了。大いなる魂の解放の裡(うら)に倉田百三の「愛と認識の出発」の読書を中心に思索と作歌によって何か生命の永遠なるものを自覚せんとし始めた。
- 3.6 西田氏の「善の研究」を読み始め感想山の如し。
 私は何かを求めんとして読む。それによって私の心が一つ一つ引き出されて来る。自己の生活の根底を得んと努力してゐる。これは間違つた読み方であらうか。文字を通して自己の全人格を著者の人格の中におち込んで行く。これでいいのだろうか。然し人は苦痛・罪惡を知らなくては生活の根底を知り、人格を向上させることは出来ないであらうか。若し然りとせば私は何とつまらぬ人間であらう。単に善良なお人よしで苦痛も悪も未体験であるのだから。自分の宗教的信念は自分にふりかゝる困苦を困苦としてでなく楽天的なものに転化させてしまつてゐる。如何なる困難も至誠通天の信仰に依つて喜びとこそなれ何等苦痛を与へない自分の精神作用がうらめしい。私は全人格的な力が欲しい。それには哲学による深い思索が必要だ。そして深い苦しみが。形式にとらわれた真面目さを棄て、自己の内奥の命に忠実でなくてはならぬ。
- 3.17 西島、幼年学校に合格す。
 まりをけり棒にさがりて西島は常にかはらず友となじむも
 世のおもし身に負ふ人となれよかし君が行く手を見守りあり
- 3.18 水風呂の水汲む音す 疲れたる頭休めてしばし聞き入る
 風呂水はたまりたるらし汲み入るゝ水落つる音高まりてゆく
 われの来て作り初めし生徒らのすなほなる歌に心引かるゝ
 開け放つ二階の窓ゆうすじものトタンの屋根にゆげ登る見ゆ
 トタン屋根は上より乾きひさし辺はいまだ濡れみて湯気たちゆらぐ
 新芽立つ庭の遠より渡り来る風は棕櫚(しゅろ)葉をひとしきりゆる
 くる雲は重たくおりて青海島(おうみじま)荒れたる海にそゝり立ちたり
 かそかなる土の香りよ雨雲のひた寄せにつゝ麥(むぎ)田吹く風
- 3.20 臨時神道講習会叢書、「神道の特長に就て」(井上哲次郎)を読み始む。
- 3.23 「国民道徳と神道(河野省三)を読み始む。
- 3.26 中原兄弟来り共に雨乞山に登る。歌70首を作る。
 此の山のなだりうねりて幾重にも峯をなしつゝ海に下れる
 油谷湾は深く入込み外海の浪をさへぎる向津具(むかつく)の岬
 此の朝を歩み来りし街道が一すじ白く青麥の野に
 日盛りの山ぐえの跡ぬくければ昼餉(ひるげ)にせんと腰を下しぬ
 竹藪の茂みを出ればとみに明(あか)し枯芝の嶺はなだり迫りぬ
 潮騒の多々の濱辺に大き浪岩床の上をうねり寄するも
 潮騒の黄波戸(きはど)の浦はとがり浪きらゝきらゝと陽に光るかも
 寄せにつゝうねり高まり伸び上がり反(かへ)りくだけの波は見あかぬ
 懸崖(けんがい*)の岩を伝(つたは)り落つる水きよらに澄みてすじ引き流る *切り立った崖
 夕日あつき麥野の路のたるればだまりこくりて歩く久しき
 目の下に麥の広野は陽炎(かげろいひ)てのろのろと行く汽車かも

- 春の陽に霞み渡れば陸の果 (はて) 海と交はり見えわかぬかも
 遠くよりざはめき来たる峯の風枯茅 (かれかや) の穂をゆり倒し行く
 老松 (おいまつ) の幹にうなれる潮風の音はひとりで聞くべかりけり
 海の面にきらめく陽影長く引き入日は低し角島 (つのしま) の上に
- 3.30 機関車の汽笛しきりに静かなる朝明の里になりとよもすも
 料理屋を出れば冷たく月さへて今宵はいたくふけりにけるかも
 赤らめる蕾頭のふつくと丸みてゐるは八重咲きならむ
 めに立ちて桜の梢 (こずえ) 色づきぬ明日は蕾の開くもあらむ
 三月の来てふ昨日雪降りて今朝は桜の下向きしぼむ
 さやかなるうぐいすの音に目覚れば障子ほのかに明るみてゐぬ
- 4.7 山口に
- 4.10 夜、土規七則・正気の歌の詠み方を教へ、明日の模試問題作成。
- 4.11 久し振りの模試、採点に手間取り苦勞
- 4.13 高校三年講義始め、今年も担任は石村教授
- 4.18 第二回模試実施
- 4.19 由道会委員召集、今後の綱領研究。原案を持って石村教授訪問し、同意を得、ここに由道会は思索的に哲学中心に大きく方向転換。
- 4.20 茂木役に立たず、池田の助力を得て短歌会会員募集のビラ作成。
 着々と建設の歩を進め来れる我山高本館は今や新しき外貌を整へて来た。新校舎の建築！それは亦それを満すにふさわしき山高精神の健全なる再興と発展とを伴ふべきである。今や山高は再び新しく興る時であらねばならぬ。此の時に当り我等も此の流れに乗り此の運動の一端にも力を致さんとするのである。即短歌道の修練を通じ生活を高め人格の陶冶 (とうや) に努め以て真の山高精神文化に貢献せんとするもの。心ある士は来れ。然して熱烈なる情熱を以て生活の真の叫びをあげられよ。我等に熱心なる教授諸先輩あり、未熟なりとも真摯なる会員あり。打って一丸となし以てその目的に邁進せんとす。歌の巧拙は問はず。未経験者も来れ。唯望むは真摯なる情熱のみ。
- 4.25 第三回模試実施。次に神社参拝に就て感想を述べさせる。私の精神教育徹底しあるを発見し喜びに堪えず。
- 4.27 靖国神社大祭の休日を利用、生徒を連れて雪舟の庭・百日紅山・陸軍墓地へ行く。
- 4.28 短歌会、題詠は「若葉」 自詠下記
 朝毎に子等が出て見る畠土にカーネーションは芽ぐみたりけり
 ひがみたる子に居向ひて云ひかくる言葉やさしきに泣けて来らしも
 葉桜の下道を行く娘らの背にはだらに動く若葉かげかも
- 4.29 天長節式後由道会のピクニック実施、水源地 (象頭山頭) に登る。参加10名、石村先生の吾人の生活は体系的な正しい人世観世界観に基かねばならぬ、学問を通して人格の力・信念が生まれるとの話は参考になった。午後2時より高商・師範・浪人を含めた大津中学校会、於藤屋、16名で。
- 5.1 プライビッシュさんより独語5分間演説を命ぜられ原稿作成、5日に実施するも暗誦不足で途中でつまって困る。
- 5.11 現代短歌について佐藤教授の特講あり。20名出席。

5.12 第30回短歌会、於静月堂 自詠下記

ひと色に空と海とのより合へるきはみに長く雲たむろせり
照り強き光みなぎる青空をまどかに限る草草の尾根
子供らと鉢に植ゑたるチューリップは明るき窓の棚に並べぬ
黄色なる一つが散れり昨日より棚にこぼれしチューリップの花

5.14 佐藤教授にお願ひして置いた短歌中より十首選出できてくる。

西島幼年学校にパスセリ

まりをけり棒に下りて西島は常に変わらず友となじむも

雨乞山に登る

新芽立つ峽の坂道長ければグリコを分けてやりにけるかも
此の山のなだり下れる岬辺の岩群はかくる大きしぶきに
見ゆるかぎり陸のきはみにつきぬけて山かげ一つおぼろに見ゆも
油谷湾に太くかげせる目の上の春の大雲目に見えて動く

雑詠

新芽立つ庭の木々より渡り来る風は二階を吹き通し行く
鳴きてみし松雀(まつめ)なきやみしばしして異なる声が亦なきはじむ
鼻黒の顔上向けて細き眼にわが思はくをさぐる猫かも
松の木に混りて高き桜木は空に広がり花咲きにけり
雪混じり嵐来たれば火を入れて節の歌集を声立てゝ読む

5.15 防長教育会の会合、於来島屋 久し振りに小川先生の熱弁を聞き胸がすく。此の夜の強い息吹きは私の心を覚醒した。武学生養成所の為、史学同好会の為大いに努力せねばならぬ。

5.18 深川高等小学校及び女子青年学校の生徒ら修学旅行で来山。父・松岡・島田先生と会ひ亀山で写真に収まる。祖父中風にかゝられた由。

5.21 今日より4日間中間試験、池田の勉学の邪魔だてに怒る。

5.26 父への手紙(父への便り10通中の昭和12年5月26日分と同じ)

拝啓、昨日中間試験を終りました。三年になると縁遠いゝ学課もなくなり、割合容易になったので殆ど一夜漬けでやりました。丁度山口中学校の試験と重なり、一年生には最初の試験なので多少手心を加へる必要があり、準備の暇が充分なく、独語は範囲が広くて手が届き兼ねましたが、他はかつがつ出来たように思ひます。今年の三年には文学部志望が五・六人ゐますが、大学入試率は困難でないにしても、出題が各学科を網羅して居り亦実力の有無は入学後他学部と比較にならぬ程重大な影響を持つので、お互いにこつこつとその方面の勉強に専念してゐます。しかし大部分の法・経学部志望者は入試が唯語学一科目だけなので、一部の者を除けば必然的に語学のみ専念するといふ結果になります。従って率は困難なるも此の点に於て楽な彼等は全く功利的になりつゝあって、唯語学をやれば事足りるとなし読書も止めて唯語学にのみ汲々としてゐます。今度の試験でも早くから準備をして得々としてゐるのですが、私には首肯(しゅこう;うなづくこと)できません。

勿論吾々には学問が第一でありそれを通して知徳を鍛錬するのですが、試験は吾々の勉強の跡をまとめ成果の程を見るのであって、勿論試験は大切ではあるがそれが吾々の総てではないと思ひます。唯成績・点をのみ追求する傾向は寧ろ軽蔑すべきものと思ひます。唯学科にのみ専心する者で

もこつこつとやりそれに信念を以て一步一步を築いて行く者には狭いながらもまだ首肯出来る所があります。しかし中には恥ずべき巧みなカンニングに依って誤魔化すが如きは、点数は取れても何の価値もなく、自ら墓穴を掘りつゝあるものだと思ひます。準備の出来ない事は自己の責任であるが日常を真剣に修学し、高校生らしく大きい理想を持って、必要な読書なり学習なりに依って、有意義に日々を送る所に吾々の進むべき道があり、かくしてこそ正しい試験が受けられるのであると思ひます。

今日「心臓が強い」といふ言葉が学生間の流行になってゐますが、これは実に功利主義の反影であると思ひます。勿論自己の発表主張の出来ないような事では駄目ですが、此の言葉はずうずうしくも、合目的々に他人を押しつけて多少の道徳的な非行は構はぬといふ考へが主体となつてゐると思ひます。三年になつて皆こんな傾向が強くなつて来ました。…高等学校以上の学校では信義を以て結ばれた交友関係は極めて少ない様に思ひます。学生が余りにも社会人になつてしまひました。

…功利主義の槽を嘗めて来た私は相当彼等に調和出来る人間にもなりましたが、此の風潮には猛烈なる反抗心を持ってゐます。今度の試験でも不幸にして準備の時間は少なかったのですが、二週間も前から準備した者とそれ程の差はなかったと思ひます。彼等が成績にのみとらわれてゐる間に、先生の特別授業も受け「大学」と「古事記」の三分の一ばかりを独習し、歌も作れば其他目に見えない読書も養成所の生徒に接する傍（かたはら）なし得ました。一年の時の如き成績は一年の時の如く勉強することに依つて得ることは出来ます。しかしそれは結局狭い頑迷な自分を作ることであつて、当時私には読書の暇も仲々ありませんでした。

高校生活の内情を理解すれば、席次の良い者必ずしも良き学生ならずして席次の良き者の内から毎年二・三名づつ容易だと思はれた入試に失敗する悲劇が見られるのは前記の勉強法の欠陥ではありますまいか。将来に向かつて大きく深い自己を作るべきだと思ひます。私には良き成績を取らんとすれば色々な独学・短歌等を止める外ありません。一般に対抗する為に学業にのみ専念することは、将来の為の自己の滅亡であり、臆（やが）ては私の軽蔑する人間への墮落となりませう。現在の優を以て以前の成績を取り返すことは恥しい事ながら殆ど出来ないと思ひます。二年の時は人の道・色々な文化運動等に依つて多少とも無駄な時間を消費してゐますが、現在の私は無駄のない充実したものだと自認してゐます。一般人のおろそかにする人間的修養もしつゝあると思ひます。私には現在の程度でしっかりと実力の養成に努める事が妥当してゐると思ひます。私の考へ的一端ですが間違ひがりましたら御叱責を受けて直して行きたいと思ひます。…

祖父の御病気には皆様も御心配の事と思ひます。悪い病とは云へ我一家の鎖の一つとして努力されたればこそ今日の一家があり私もあるのでありますから、心から御慰め申上げると共に私達も受け継いだ一連の鎖の一環として大いなる努力をなすことこそ私の努めであると信じます。

上記に対する父の返事(5月末)

…お前の議論は正々堂々であるし…どこか奥に信じてゐる所があるやうである。…大学パスといふことはどうしても眼前の目標である。…故にどうか他人から高等遊民等といつて笑はれるやうなことの無いやう注意して欲しい。別に不足はない。しっかりやつて呉れさへすればそれで私の方は小言もない。一家の家名を中興して呉れることを朝夕念願してゐるのみ。要するに人間的に見て偉大になりつゝしっかりして呉れることを希望するのみ。下略

- 5.26 小川先生に選をさせていただいた歌27首、これを鴻峰に載せることにした。
- 5.29 第6回模試実施。防長精神に目を向けさせる教材使用を
最近の読書、志那思想史・田辺元の哲学通論
- 5.31 岡本と話し彼の偉大さに驚き教えられる。かれに較べると我々はソフィストに過ぎぬ。馬鹿になす洗瀆（せんさん：洗い注ぐ）して真実の学問をする必要を感じず。
- 6.4 由道会5月例会開催、八方手を尽くして30名を集め、小川教授の「防長教育の源流、特に国木田独歩と吉田松陰」と題する講演会を催す。先生の心血を注いだ熱弁に感動す。
- 6.6 洞春寺に於て由道会合宿開始、始め二人、三日目より六人の低調さ。鹿子木氏の歴史哲学より、世界革命・心と物等を討論、雑誌部の仕事と重複し精根尽き果てる。
- 6.10 第31回短歌会、自詠下記
暮るゝまで子等が遊べる広庭にゆゝしく立ちし土ぼこりかも
砂煙たてゝ遊べし庭の面に夕さりければ水をうたしむ
- 6.11 由道会合宿解散。先生と合せて10人、これで幹事を藤村法説に譲り18日の総会を終て我が任務完了なり。安心す。
- 6.13 年9回模試実施。果して効果ありや。過ぎたるは尚及ばざるが如しの観あり。生徒に無理な期待をかけ過ぎてゐる。再検討を要す。
- 6.14 余りにも他人に買いかぶられてゐる自己を発見し嫌になる。老子を勉強して益々明瞭となる。柔弱勝剛強は甚だ意味深き哉。仁義を云ふな、徳を云ふ勿れ。そは乱の始・愚の始なり。
- 6.18 由道会総会を開き幹事引退す。私は偶然橋本・匹田・石村教授が私の最近の不勉強不成績に就て考察してゐられるのを聞いた。橋本教授は仕事が多過ぎるからだと云はれた。誠にその通りである。しかし多くの仕事は果して無駄な骨折りではしなかつたか。単なる無為とは異なる。何か精神的なものを得たる也。但し積極的にどこまで労力を有意義なものに転化し得たりや。日に三省、自己を知れ、歴史的社会的に自己の位置を自覚せよ。私に告ぐ所なり。
- 7.1 田坂興道先輩帰山、色々教えを受く。特に良書を推薦さる。平泉澄の「我が歴史観」黒板勝美の「国史の研究」なり。これを読み始む。
- 7.9 飯山八幡宮の内紛、社司彌太郎さんの養母刃傷事件となって爆発。
- 7.11 久し振りに藤田閣下と面談、生徒指導上得る所大。
- 7.13 武学生養成所生活半年の総括
- 7.17 西島来所、18日西島と話し生徒指導上のヒントを得ること大なり。
- 7.24 最近の読書 「心に太陽を持て」「日本精神の哲学」「母への手紙」「現在短歌観賞」「利玄と憲吉」「土屋文明歌集」
- 8.1 帰京第一日、大津中学校同窓会に出席、時勢を反映いや気を催す。
- 8.6 皇室の御敬神（星野掌典）を読み抜書す。
- 8.17 出山、生徒末富の転校問題起り、19日親と会ひ20日退所を命ず。
- 8.24 生徒と鳳翻（ほうべん）山登山
- 8.27 田坂・玉重両先輩に会ふ。田坂兄より指示されて、万葉人の忠義の歌を研究してみることにした。
- 8.29 池田より短歌の評を求め来る。10首なり。
- 9.1 本格的に万葉集忠義の歌の研究に着手、参考図書をまとめ、構想を練る。

- 9.5 夜橋本教授の所に行き「大学」の不明な点を質問。先生大いに喜び激励さる。中国の偉大さを痛感す。
- 9.6 新校舎での授業開始、内装貧弱・音響強く、ペンキ臭で落ち着かず。始業前講堂で校長より日支事変に伴う諸注意あり。
- 9.9 大学入試準備として月・金放課後独語の模擬試験を行ふこととなる。図書購入「古代世界美術大観・中世世界美術大観」「西洋哲学史」「ビルヘルム・テル」「歴史と自然科学と道徳原理・聖」
- 9.21 第32回短歌会
- 9.24 暁のおぼろにあをむ内海を沖より帰る船ちかづきぬ
あかつきのなぎわたりたる内海の向つ島山陽に染りたり
張り替へし障子明るみ庭の木に松雀(まつめ)群れみて朝なきになく
霧晴れて朝日かがよふ庭うらの梢を高め松雀しきなく
我が部屋のたたみに入りし満月を母は独(ひと)りで見給(みたま)ふならん
うつむきて物云はざりし此の児はも庭すみに出て反故(ほご;書き損じ)をやきゐる。
- 9.30 今日は大いに考へさせられた日であった。朝から夜まで慎重に考へなくてはならぬ問題が次々に捲き起こり、神が私に試練を与へてゐるかの様であった。
一、朝当番が嘗てなき程朝寝して道場集合が後れた。これに対し如何に処理するかであった。式後理を尽してその不可を論じ今後の緊張を促し延長一日を申付け、他の者にも団体生活上友情を発揮し、連帯責任を負うべきを諭す。
二、登校途上海兵志願の後輩らに会う。激励と受験上の注意を与ふ。
三、学校で小川先生に睨まれる。何を意味するのか如何に対処するか考へさせられる。
四、クラス会開催に就て哲学の時間に石村先生から大いに訓育される所があった。これに対するクラス員の反応のあり方に就て。
五、夜算術授業を実施、生徒の不真面目な態度に就て
- 10.3 松村直君が吉田松陰先生頌を寄せて呉れた。一読して非常に感激した。彼は徳富氏の吉田松陰を読んだのであるが、彼の真情は此の文を通してゆり動かされ、彼の豊かな漢文の素養と相倦(あひま)って次の玉篇をなしたのである。こゝに彼の真面目の躍如たるを見る。曰く、「偶々(たまたま)松陰先生の事蹟を読み、当年と現時と状相通(あひかよ)へるを見て感慨禁ずる能(あた)はず。因つて拙(まず)き一聯の辞(ことば)を草(くさ)して感慨を叙(の)ぶ。唯恐る、僕の辞俗にして先生非凡の大価値を損(そこな)はん事を。終りに先生死罪に決するの日故山の父兄に寄せられし永決の書を載せ以て先生当年の胸中を味はんとす。と亦篇頭に曰く「天地悠久にして身世転(うた)た匆忙(そうぼう)松陰逝(ゆ)いてより茲(ここ)に八十星霜(せいそう:年月)、彼が幽魂(ゆうこん)尋ねんとするも今何処にか在る、小塚原頭悲風愴々(しゅううしゅう;さびしい)として祠辺(ほこらべ)の虫声徒(いたず)らに傷心せしむ。亦来篇に曰く、「時艱(かん)にして此れを思ひ彼を思ひ半夜眠を成さず、起つて彼が絶命辞を誦すれば新に覚ゆ断腸奮躍の情を」
続日本精神史研究の日本精神論は我万葉論に大なるヒントを与へ呉れる。
- 10.10 夕小川先生を訪問。今度の模擬試験の国史の問題に就てである。久し振りに接した先生は何と云つてもいゝ先生だ。厳父であり慈父である。私の為に身を計って下さること、あゝ此の先生一人であるのみ。豈知遇に感激せざらんや。先生は私を責任を持って仕事を任すことの出来る人間だと認め

て下さってゐる。私を山高生中の最たる人間として推挙して下さい。何で此の慈愛に泣かざるを得んや。私は嬉涙が出た。そして先生を本当に偉い先生だ、一生を懸けて弟子となるべき先生だと更に更に深く心中に銘じた。明後日山田孝雄先生の話について、山田博士の大国士たる所以を私に教へられ、博士の「我国体の本義」なる書を預備（よび）の為に読むべきを私に教へ給うた。

あゝ歴史は人なるかな。

10.12 13日も併せ二日続けて我が国体に関しての山田博士の講義を聞く。要点は日記5日分に亘って記述せるも省略

10末 「万葉人の国家及び国体観に就て」の研究論文完成

昭和

13年

2.？ 恵良咲登、陸軍士官学校合格

3.7 山口高等学校文科乙類卒業

了 2023年8月21日 訓読みと注を施す 啓之